

大谷大学真宗総合研究所

# 研究所報

No. 23

1990. 3. 20.

目次

1990年度「一般研究」選考結果	1
アメリカにおける仏教事情	2
フランスの日本宗教研究の現状	9
第2回国際ダルマキールテイ学会に出席して	12
国際真宗学会第四回大会に出席して	15
国際仏教学会第9回大会に参加して	18
いくつかの大学を訪問して	21

大谷大学真宗総合研究所

## 1990年度「一般研究」選考結果

1990年度の「一般研究」が、研究所委員会において審議・選考され、下表のように決定された。共同研究4件、個人研究2件である。このうち臼井元成教授、内藤史朗教授を代表者とする共同研究、および佐々木令信助教を代表者とする個人研究は、昨年度からの継続研究である。

新規に採用された木場明志専任講師代表の共同研究では、太平洋戦争終結以前における、真宗の対アジア布教の展開過程の実態を究明する。沙加戸弘専任講師代表の共同研究では、仏教文学・仏教芸能の歴史の中で、大きな位置を占めてきた絵解について、「親鸞聖人御絵伝」絵解に焦点をあてて研究する。加来雄之専任講師の個人研究では、近代真宗教学に大きな足跡を残した曾我量深・安田理深の意義を唯識学との関係から研究する。

### 1990年度一般研究

#### (A)共同研究

研究代表者	研究テーマ及び研究組織	補助金
臼井 元成教授	「『教行信証』の書誌学的研究」 研究員 臼井元成、幡谷明 (以上教授・真宗学)、江上浄信 (助教・真宗学) 研究補助員 田村健一 (博士課程)、吉田宗男 (博士課程)	100万円
木場明志専任講師	「近代における真宗の対アジア布教の展開過程」 研究員 木場明志 (専任講師・国史学)、桂華淳祥 (専任講師・東洋史学) 小島勝 (龍谷大学助教授)、遠藤一 (龍谷大学講師)	100万円
内藤 史朗教授	「外国語教育と聴覚障害教育における言調聴覚論の研究」 研究員 内藤史朗 (教授・英文学)、岩見至 (教授・仏文学)、友田孝興 (助教・独文学)、鈴木繁一 (助教・英文学)、櫛原孝 (専任講師・言語学)、加来一丸 (助教・仏文学)、禿憲仁 (助教・独文学)、築山修道 (専任講師・英文学)	100万円
沙加戸弘専任講師	「『親鸞聖人御絵伝』絵解の基礎的研究」 研究員 沙加戸弘 (専任講師・国文学)、細川行信 (教授・真宗学)、阪口弘之 (大阪市立大学助教授)、林久美子 (梅花女子短期大学講師)	100万円

#### (B)個人研究

研究代表者	研究テーマ及び研究協力者	補助金
佐々木令信助教	「平安朝寺院組織の研究」	50万円
加来雄之専任講師	「真宗近代教学における唯識学研究——曾我量深・安田理深の教学の意義——」 研究補助員 カルロス・カジヤ、井上尚美 (以上修士課程)	50万円

『海外仏教研究』研究会報告

日時：1989年7月18日（火）

場所：研究所会議室

## アメリカにおける仏教事情 — 禅・真宗・キリスト教 —

Pacific School of Religion 客員教授  
奈良教育大学名誉教授

阿部正雄

本日は、こちらの長崎先生から、お招きをいただきまして、何か話をするようにというので参りました。この機会に皆様方にお目にかかることができまして、たいへん嬉しく思っています。

今日の話の題は「アメリカにおける仏教事情」ということに致しました。承りますれば、こちらの研究所には海外仏教研究プロジェクトというのがあって、海外での仏教研究の状況などをいろいろご研究になっておられますので、私もいくらかアメリカに長くおりましたので、自分の体験を通して、いろいろ感じとりましたことをお話ししてはどうかと思ってお参った次第です。

しかし私はアメリカで仏教研究がどのようになされているかということ、組織的にいいますか、系統的に、調査研究していたわけではありませんので、向こうでのいくつかの大学で客員教授をつとめました個人的な経験を通して、私の触れた限りでのことを申し上げ、特に重点を禅とキリスト教、真宗とキリスト教というところへ置いて、お話ししたいと思います。

### (一)

まず初めに、そういう話の前提として、私のアメリカでの体験を簡単に話しさせていただきたいと思えます。私が最初にアメリカへ留学したのは、1955年で、昭和でいいますと昭和30年ですが、終戦後十年ほどたった頃で、まだ、海外留学する人も比較的少ない時期でした。それ迄、日本におり、私は京都大学で宗教哲学をやっておりましたが、ポール・ティリッヒの組織神学だとか、ラインホルト・ニーバーのキリスト教倫理の書物などを読んで特に興味を覚えたものでした。そこで、アメリカへ行って、ティリッヒやニーバーに師事しキリスト教の勉強をしたいと思っておりました。幸い、鈴木大拙先生がロックフェラー財団の方へご推薦くださったものから、この財団の研究員ということで、1955年から57年迄、コロンビア大学と、それからブロードウェイを隔ててすぐに隣にあるユニオン・セオロジカル・セミナリーという神学校へ留学したわけです。

コロンビア大学では、ちょうど鈴木先生が Department of Philosophy で、主に禅と華嚴について講義をなさっていました。私は、二年間、その講義に出席させていただき、つぶさに鈴木先生が外国人に仏教なり、禅をどういう風にお説きになるかを聞かせていただいたわけです。

それからユニオン神学校の方は、今申しましたポール・ティリッヒ、ラインホルト・ニーバーという今世紀でも指折りの神学者、その他、ジョン・ノックスだとか、バン・デューセンとか、非常にすぐれた神学者がそろっておりまして、いわばユニオン神学校の黄金時代といわれたような時期でした。そこには、私の行く前に、その当時東本願寺の新門であられた大谷光紹師、今はどう申したらよいのでしょうか、東京で東本願寺より独立しておられると聞いていますが、そのお東の新門さんが留学しておられました。新門さんが仏教徒としてユニオンで勉強なさった最初の方で、私はその第二号になったわけです。ここでの勉強は、キリスト教を生で学べた神学者から学ぶことができ、私にとっては非常によかったと思っています。

それから、1957年の夏に、アメリカを立ちましてヨーロッパ・インドを通して日本へ帰り、奈良の教育大学に勤めました。その後、1965年に、ロサンゼルス郊外にありますがクレアモント・グラデュエイト・スクールというところから招かれて、私にとっては初めて客員教授として仏教の講義をその秋学期に行ないました。翌年の春学期はコロンビア大学の方で、日本仏教の講義と西田幾多郎の『善の研究』についてのセミナーを致しましたが、私の知る限り、日本以外の大学で西田哲学のセミナーが行われたのは、これが初めてではないかと思えます。

この時に出席していましたディビット・ディルウォースという人は、フォーダム大学で西洋哲学で PhD. を取ったあと、コロンビア大学へ来て、中国哲学、特にワン・ヤン・ミン（王陽明）などを研究していましたが、私のやっていた『善の研究』のセミナーに出て、日本哲学は中国哲学よりはもっとダイナミックでおもしろ

いというので、専攻を中国哲学から日本哲学へ替え、その後は西田哲学を研究し、今では海外での西田哲学研究者としては、筆頭といってもよい方になっています。

その時は65年から66年にかけて一年間、アメリカにありました。その後、日本へ帰りましてからも、プリンストン大学、シカゴ大学、それからカールトン・カレッジなどから異なった時期に客員教授として、仏教とか、日本の思想の講義に招かれまして、短い時は三ヶ月、長い時は二ヶ年、向こうで滞在いたしました。

それがちょうど1960年代から70年代にかけての頃で、禅や仏教に対する関心も一種の流行現象から抜けて、もっとまじめな、本格的な関心がだんだん出てきた時期でした。わたしは向うで学生に講義をしたり、同僚の教授たちと語りあったりして、そういう真剣な仏教なり、東洋思想への関心が、次第に高まりつつあるということを感じておりました。そこで、なんとか日本人の側から手をさしのべて、交流をしなければならないということを感じておったわけです。

その頃、アメリカの宗教学者やら神学者、あるいは学生などから「あなたは客員教授で時々来るのでなしに、もっと本格的に、アメリカに腰を据えてやらないか」というような要望をいくらか聞きました。それで、1980年、奈良教育大学を定年退官しましたのを機会に、アメリカへ居を移して、及ばぬながら自分のできる限り、仏教なり、日本の哲学思想を伝えようと決心しました。それからは、年に一度、夏に一カ月半帰ってくるという形で、だいたいアメリカの方に居をかまえておるわけです。

最初は、さきほども申しましたクレアモント・グラデュエイト・スクールに四年間おりましたが、そこにはジョン・カップ教授という神学者がおられ、その方と組んで、後でもう少し詳しく申しますが、主として仏教とキリスト教の対話につとめていました。

その後は、ハワイ大学の Department of Philosophy から招かれまして、日本哲学の客員教授として二年間ハワイにいました。このハワイ大学では、御存知の方も多と思いますが、東西哲学会議 (East West Philosophers Conference) という、東西の哲学思想の交流を目指す大きな学会が、戦前の1939年から十年毎に開かれており、東洋宗教なり、哲学に対して、非常に関心があるだけではなく、大学の哲学部のなかに東洋思想のちゃんとした講座を設けている、アメリカでもユニークな大学です。

アメリカでも、ここ二十年程前から、仏教の講義は多くの大学でやっておりますが、それは歴史学部 (Department of History) とか、東洋言語文化学部 (Department of Oriental Language and Culture) とかあるいは、せいぜい宗教学部 (Department of Religion) で行なわれていて、哲学部 (Department of Philosophy) では仏教の講義は行なわれていません。というのは、仏

教を哲学とは認めていないからなのです。ですから、仏教の講義は歴史学部や東洋言語文化学部でやっている。哲学というのは、プラトン・アリストテレス・デカルト・カント的な非常にラショナルなのが哲学であって、東洋的なもの、仏教とか儒教は哲学ではないというのが、少なくともごく最近までのアメリカ学界での認識になっているわけです。そういう中であって、ハワイ大学だけは哲学部 (Department of Philosophy) の中に、インド哲学、中国哲学と並んで、日本哲学という教授職があるわけで、アメリカとしては、これは非常に例外的なことです。

このハワイ大学で、日本哲学の講義を二年間担当しました。その後、今度はアメリカ本土の東海岸の方、フィラデルフィアの近くにあるハーパーフォード・カレッジに招かれましたが、そこには、東西思想の比較研究に力を入れているクロスカルチュラル・スタディ・センターというのがありまして、ここに二年おりました。それからシカゴ大学へ移り、現在はパークレーにありますグラデュエイト・セオロジカル・ユニオンというところにおります。

パークレーは、ご存じのように、カリフォルニア大学・パークレー校という非常に有力な大学がありまして、仏教の方はランカスター教授がおられます。そのキャンパスに接続して、十校程の神学校が集って、ひとつのユニオンを作っているわけです。メソジスト、プレスビテリアン、ルター派、カソリック、それからユダヤ教の神学校もありますし、2年程前から、仏教側から西本願寺系の仏教研究所 (Institute for Buddhist Studies) というのも、そのユニオンに加わりました。そんなわけで、主体はキリスト教ですが、それにユダヤ教と仏教の学校が一枚づつ加わり、神学校のユニオンができております。

そのひとつにパシフィック スクール オブ レリジョン (Pacific School of Religion) というのがありますが、これはインター・デノミネーションな神学校で、キリスト教でありつつ、どの宗派 (denomination) にも属さない非常にリベラルな学校であります。この神学校は大学院大学で、学生はたいていいずれは牧師になり、あるいは神学者になろうという人達で、今まで弁護士やら医者をやっていたけれど、発心して牧師になろうというような三十才・四十才ぐらいの人もいます。皆非常に程度も高く、熱心な人達です。そこで仏教の講義をしているわけですが、私自身にとっても非常に刺激的な体験 (Stimulating Experience) であります。

## (二)

以上のべましたような各地の大学での講義の他に、私は仏教とキリスト教の対話ということに、学生時代から興味をもっておりますので、アメリカへ行きましてからも特にそのことに力を入れておるわけです。

1980年にハワイ大学で、デビッド・チャペルという中国仏教を主にやっておられる方が企画して、East West Religions という大きな会議を開かれました。世界各国から、仏教とキリスト教の対話について関心のある人が約百五十人集まり、神学的な分野だけでなく、宗教心理学、宗教社会学、それからミッシヨロジー (missiology) 等、いろんな分野に分れての大きな会議でした。この会議は、だいたい四年ごとにやることになっており、第二回もハワイでやりましたが、第三回は1987年にパークレーで更に大きな規模でやりましたので、おいでになった方もあるかと思えます。

これはこれでいいのですが、あまり会議が大きすぎて、もう一つ深い議論なり、研究ができないおそれがありますので、先ほど申しましたジョン・カップ教授と私が相談をして、もっと小さな規模で、その代わりもっとイン・デプス・ディスカッションのできるような会議、そして分野も神学的な研究に限るということで、Buddhist-Christian Theological Encounter Group というのを1981年に作ったわけです。

これは、ジョン・カップ教授がアメリカ・ヨーロッパから十名ほどの神学者を選んで招き、私が仏教の側として、同じく十名ほどの仏教者や仏教思想家をお招きし、顔ぶれはできる限り変えないで、毎年、三泊四泊ぐらいの会議をやり、ある特定の問題を選んで、キリスト教と仏教の間でできる限り深く、徹底的に論議をしようというものであります。キリスト教の方からは、シカゴ大学の神学者ラングドン・ギルキー、デビット・トレイシー、ハーバート大学のゴールドン・カウフマン、サザンメソジスト大学のシューバート・オークデン、ヨーロッパからはチュービンゲン大学のハンス・キュングという方々です。こういった人選は、もちろんジョン・カップ教授がされたわけですが、カップ教授の構想は、現在指導的な神学者で、今迄特に仏教を研究していなくてもかまわないが、ただ、オープンマインドで仏教との対話の中へ入っていく用意のある人達を毎年招き、仏教側との対話の場を設け、仏教から学ぶことを通して将来のキリスト教神学の方向を変えようとするものです。カップ教授は「Christianity Needs Buddhism」「キリスト教は今や仏教を必要とする」とはっきり言われる。つまり、キリスト教が現代世界の中で生きた宗教として働いていくためには、仏教を必要とする、仏教から学ばなければならない、という認識のもとに、神学の方向を転換させるために、先ほど申した有力は神学者を約十名えらんで招くということでした。

そういうことですから、私も、仏教の側で、おなじようなことをやる必要があると思いました。そこで次のような人々をお招きすることにしたわけです。即ち、初期の仏教並びにテーラヴァーダブuddhiズムを代表する人として、スリランカ出身のデビッド・カルパハナ、こ

の方は現在ハワイ大学の教授で、ナーガールジュナについての本を二年ほど前にだされました。タイからスーラ・シバラクシャ、この方は学者というよりも仏教の実践家で、タイを中心とした東南アジアでのデベロップメント アンド ブuddhiズムという現実的な問題にとりくんでいます。それから、チベット仏教の方は、ヴァジニア大学のジェフリー・ホプキンス教授、中国仏教の方は先きほどのハワイ大学のデビット・チャペル教授、日本の方からは、やはり英語でディスカッションができる方でないと具合が悪いので、限られてくるわけですが、浄土真宗に関しては、幸い、スミス・カレッジに海野大徹さんがおられますので、龍谷大学の武田龍精さんとお二人で代表していただき、禅とか日本仏教を代表するものとして、花園大学の常盤義伸さんや私に加わっているわけです。

それでこういう顔触れでこの会議に毎年集まって論じあうわけですが、ここで気がついたのは、キリスト教側は非常に熱心に仏教のことを知ろうとして尋ねてくる。縁起とはどういうことか。空とはどういうことか。無我とはどういうことか。と非常に熱心に質問をしてくる。これに対して仏教の方は、空とはこうです、縁起とはこうです、と言って何とか対応はするけれども、キリスト教に対して質問し学ぼうとする態度があまり見られない。これはひとつには、キリスト教の人達が仏教に対して、非常にフレッシュなインタレストをもっているということもあるでしょうが、それだけでなくキリスト教の神学者達には、現代の科学技術の世界、新しい人間の問題状況に対して、キリスト教はこのままではいけないという一種の危機意識がはっきりある。それに対して、仏教の側の人は、そういう危機意識というものがはなはだ希薄であって、「仏教は現状でいいんだ」というふうな感じがあるんじゃないかと思えます。

けれど、決して仏教は現状でいいとはいえないので、対科学技術の問題とか、生命倫理の問題、社会変革、歴史観の問題とか、さまざまな現代の新しい人間の問題に対して、例えば縁起の思想とか、空とかいうことが、どう働きうるのかということ、今日新しく展開されなければならない問題だと思えます。

以上は私が幾らか体験したことでありますが、ここに、その会報を持ってきました、Society for Buddhist-Christian Studies という団体は先ほど申しました、パークレーでの1987年の会議の後、それまでの会議をふまえて新たに組織されたものですが、今日急速にたかまりつつある仏教とキリスト教の対話ならびに比較研究について、総合的に情報を交換し、思想的実践的に協力し合っていくソサイアティをつくらうということのできたものです。これは北米だけでなく、ヨーロッパ、アジアも含めて、およそ仏教とキリスト教の対話にかかわることについて、世界的な規模での総合的な連絡機関として相

互理解をふかめようという団体です。

私の考えでは、仏教とキリスト教の対話は最早何人も止めることのできない世界の大きな流れになってきているのではないかと。将来の人類社会が調和のある一つの共同体になっていくための、精神的なファウンデーションを築くうえで、仏教とキリスト教は何を貢献しうるのであるのか、深い対話を行っていく必要があるのではないかと思います。

### (三)

前置きが長くなりましたが、次に、禅とキリスト教について、それから浄土真宗とキリスト教について申してみたいと思います。

わたしが最初にアメリカへ参りました1955年頃は、禅ブームといわれた頃で、禅が一種のファッションみたいな流行になっていて、学者や思想家だけでなく、たとえば音楽の方では、ジョン・ケージという人が禅からヒントをえた音楽をやるとか、絵でも禅的な影響を受けたものがでてくるとか、又心理学や精神分析の方でも禅をとり入れたセラピーをするといったように、非常にポピュラーな段階まで禅が浸透しておりました。私がニューヨークに来てしばらくした頃、ニューヨーク・タイムズのサンデー・エディションに次のようなマンガが出ていました。二人の男が、テーブルに向き合って、すわっている。一方の男が、何か、しょげてすわっているのです。相手の男が、「君、どうしたんだ」とたずねる。「いや、離婚したいと思うが、慰謝料が高いので困っているんだ」という。そうすると、こちらの男が、「それなら禅でいけ！」と。こういうのがマンガに出てくるのです。禅には、どんな面倒な問題もただちに突破し、解決する力があるという風な理解があるらしい。それは的をはずれた禅の理解ですが、そういうのがニューヨーク・タイムズのマンガに出るほどに、その当時アメリカでは何かというと、禅・禅という風潮がありました。

けれど、そういう禅ブームは、1950年代から60年代の初め頃迄で、その後だんだん鎮静化してき、むしろ、それに代わってチベット仏教に対する関心が、アメリカでは非常に出てきました。中国共産党に侵略されて逃げたチベットのお坊さん達がアメリカにも来たり、ダライ・ラマが来たりしたことも関心を高める要因となりましたが、それだけではなく、禅は非常にきびしくオースティーンに見えるが、それに対して、チベット仏教は、マンダラやその儀礼など非常にカラフルで感覚に訴える所があるという点もまた、アピールしたようです。

今でも、チベット仏教に対する関心は決して衰えてはいませんが、他方禅に対する関心が衰えてしまったかという、そうではありません。ブームみたいなものは、沈静化してしまいましたけれど、私のみるところでは、かえって別の形で禅は根を下ろしつつあるのではないかと

と思います。

ひとつは、禅の本を読んでサロンであれこれと、公案はどういうものかと、悟りはどういふものかというようなことを論ずるのではなく、禅を本当にわかるためには実際に坐禅をやる必要がある。坐禅のプラクティスをやらなければ、禅はわからない。そういうことが次第に気づかれて、アメリカのあちこちに禅センターができて坐禅をやり、あるいは一種の禅的な共同生活をやるようになってきました。もう今は、アメリカでおそらく百ヶ所以上の禅センターができていてのではないかと

思います。そういう坐禅の実修に向かう方向と、もうひとつは、もっと学問的あるいは文献的、歴史的に禅を研究する。たとえば、『臨済録』や『碧巖録』、さらに『六祖壇経』といったものを翻訳し、禅の原点から禅を理解していくという方向であります。アメリカの禅は、今この二つの方向に向って発展しているのではないかと思います。

アメリカやヨーロッパで、禅に対する関心が強いのはたしかですが、その一番根本的な点はどこかということが問題だと思います。禅にまじめに取り組んでいる人たちに、「あなたは、どうして禅に興味をもたれるのか」と聞いてみますと、色々な返事が返ってきます。たとえば、そのひとつは、「ユダヤ教やキリスト教では、いつも神様から自分のやっていることを見られているような感じがする」という具合に、彼らの心に一種の威圧感があるらしいのです。それに対して、「禅では神というものを立てない。神のない宗教でありながら、そこに非常に深い宗教性がある。それで自分は禅にひかれるのだ」という。本来、キリスト教の神は単に裁きの神ではなく、むしろ愛の神であり、赦しの神であるというところがあるわけですから、その人のキリスト教理解そのものが充分とは言えませんが、とにかくそのような意味で、禅に興味をもつという人がかなりありました。

また、「禅は、人間の罪を強調してその主体的立場を否定的にみるのではなく、むしろ本来の自己に目覚めるということを根本とする。その意味で人間の主体性を貫くような宗教である。キリスト教では、善悪を知る智恵の木の実を食べて人間が理性的に目覚めたということが、直ちに人間が神に背いた罪であるというのが、禅では、真の自己に迷いから覚めて帰るということ坐禅を通して体得するところに自分は興味をもつ」というような返事が返ってまいります。

こういう問題は、神学者と話しておいても色々な形で出てきます。ご存じのように禅では、「仏を外に求めるな」ということを厳しく申します。外に求められるような仏は、真の仏ではない。それでは、仏を外にではなく、内に求めたらいいのかというと、それもまたよくない。何故ならば、外に求めないで内に求めたとしても、おおよそ「求める」というところには、何か「自己の外に」

という意味があります。求めるということには、内と外の別というものが既にどこかに立てられているわけで、そのように何かに対象化された仏は、仮にそれが内に求められていても、真の仏とは言えない。ですから、外にしる内にしろ、およそ求めてはならない。求めなくても、本来あなたは仏ではないか。本来の自己はそこに既に目覚めているではないか、というのが禅の立場です。禅では「向わんと擬すれば即ち乖く」ということをよく申しますが、仏を求めようとすればする程、ますます本来の立場から外れてしまう。求める以前のところに立ち帰り、そこに目覚めるということが重要であります。

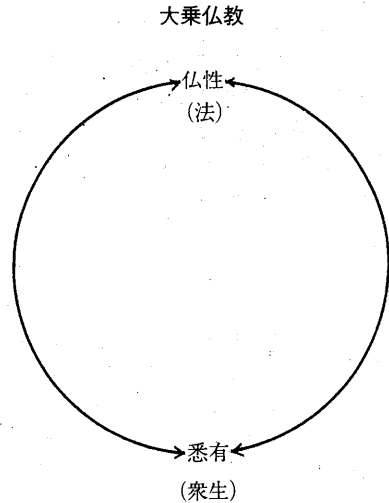
臨濟などは非常に厳しい言葉を吐きます。「仏を求め、法を求めるは、これ即ち造地獄なり」と。「仏を求め、法を求める」ということは、およそ佛教徒としては、なすべき第一のことであるはずですが、そのように「『仏を求め、法を求める』ということは、これ地獄を造る業（わざ）である」という非常に厳しい言葉を臨濟は吐いております。私自身この言葉を読んだ時に、正に冷水三斗を頭から浴びせかけられたような思いをいたしました。そういう「求仏求法これ造地獄業」ということは、徹底的に自己本来の立場に立ち帰れ、ということであり、そこにまた自他一如の立場も開かれてくる。

こういうことは、キリスト教からみれば非常に違ったことであります。キリスト教では、人間の本来の姿は、むしろ原罪ということで、人間の力では何とも贖うことができない。ただ神の子イエス・キリストが罪なくして、人間のために十字架上で死なれたという神の贖いの行為を信ずる信仰によってのみ、人間は救われるのである。ここに禅とキリスト教の根本的な違いが出てきます。そこで、この点をどう理解し、どう超えていくかということが問題になりますが、あまり時間がありませんので、この辺で浄土真宗の話に移って、今の問題にも後で立ち帰っていききたいと思います。

#### (四)

仏教の立場、特に大乘仏教の立場は、しばしば次のように言い表わされます。たとえば涅槃經では、「一切の衆生は悉く仏性を有す。如来は常住にして、変易あることなし」と言われます。一切の衆生は皆悉く仏性をもっているというわけです。さらに道元などでは、ご存じのようにこの涅槃經の文を読み換えて、「一切は衆生なり、悉有は仏性なり」といいます。即ち、生き物だけでなく、山や川や岩もふくめ有情無情のすべてが衆生であり、仏性をもっている、いや、もっている、というよりも仏性であるということ。そこに、「悉有は仏性であり、仏性は悉有である」という、いわば完全な円環が成り立ちます。こういう立場が、大乘仏教の根本にあるのではないかと思います。

キリスト教の場合だと、こういうことは言えません。



「神あって人間あり」とは言えても「人間あって神あり」とは言えない。神と人間の間には絶対の断絶があり、その断絶は神の側からしか超える道はないからです。イエス・キリストはこの断絶を越えて神と人の融和を実現すべく神より遣わされた仲保者に他なりません。

さて、浄土教も、今述べた仏教の根本的立場の中から出てきたものであることは否定できません。浄土教ももちろん大乘仏教のひとつであるわけですから。仏教では、今述べましたこういう立場を、いわゆる止法の立場と言いますが、この法というのは仏教で色々な言い表わされています。たとえば「如」であるとか、「涅槃」、**「空」**、「無相」、「自然」であるとかです。浄土教の祖師方は親鸞聖人を含めて、こういう立場が「正法」の立場であるということを決して否定しておられません。むしろそれは、親鸞を含めて浄土教の立場のいわば大前提になっていると思います。ただ、その「正法」は今や時機に相應しなくなっている。そこに「今は」という歴史意識というものがある。いわゆる正像末の三時ということで、正法像法の時代からはるかに隔たった末法の時代に我々は今生きている、という歴史意識があると同時に、末法濁世の中に生きている自分は無始爾來生死流転を重ねている罪惡生死の凡夫である、という実存的な自覚がそこにあります。「今は末法だ」という歴史的な自覚と「自分は罪惡深重の凡夫である」という実存的自覚が結び合っているところに浄土教というものがある、特に親鸞聖人の場合はそこに立っておられるのではないかと思います。

親鸞聖人が「悪性さらにやみがたし、心は蛇蝎の如くなり、修善も雜毒なるゆえに、虚仮の行とぞ名づけたる」と語るとき、単に「悪性やみがたし」と言っておられるのではない。「悪性さらにやみがたし」と言っておられる。なぜ「さらに」と言われるのか。親鸞聖人が悪性をやめ

ようと、あらゆる努力をされたけれども、「さらにやみがたし」という、そういう実存的な罪の自覚というものがそこにあるからだと思います。

ですから、正法は正法に違いないけれども、今や正法から遠く隔たった末法の我々は直ちに仏性を有するという形で、法と衆生が円満するということとははやできない。そこに、正法から脱落してしまった衆生をそのまま救わんと、法自身が如自身が我々の方に接近してこられた。この法はいわゆる「色もなく、形もましまさぬ法性法身」ですが、その色もなく、形もましまさぬ法性法身が形を現し、すべての衆生を救わんとする願を發して我々衆生の方に身を起こして来られたのです。そこに、形なき法性法身が形のあるいわゆる方便法身の姿をとり、その願が成就したところに阿弥陀が成仏された。我々衆生はその弥陀を通し、弥陀の本願を通して初めて形なき法性法身に至ることができる。いわば阿弥陀仏は、形なき法性法身と我々衆生との仲立ちとして、いわゆる「自然のやうをしらせんれうなり」と言われる「れう」として働いておられる。

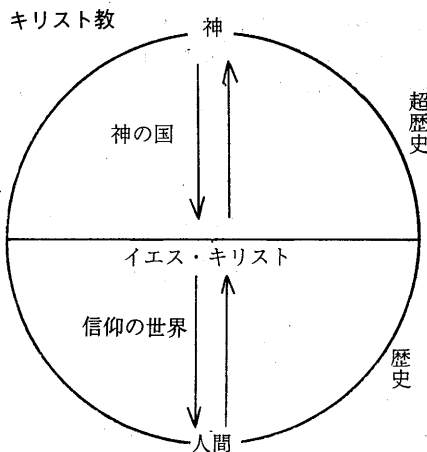
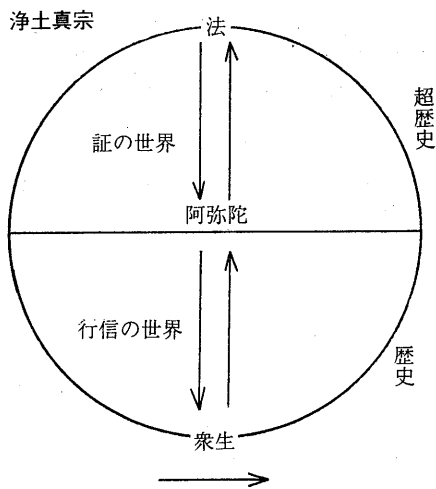
その限りでは、浄土真宗はキリスト教とも非常に相通ずるところがあるわけです。ちょっと言い落しましたけれども、私は最初アメリカへ行きまして時、ハワイの西本願寺の別院へ日曜日に参りました。そして西本願寺別院のサンデー・サービスが、プロテスタント教会のサービスと形式が極めて似ているのに一寸驚いたわけです。勤行の後に、献金のバスケットが回ってくるとか、讚仏歌の文句は違ってもメロディーは賛美歌から取ってあるとか、更にお説教が済んでお参りの人が帰っている時に、開教使の人も急いで出口の所に行き、一人ひとり握手して送り出すのです。これは、もう全くプロテスタントの教会と同じ様な形式です。それだけではなくて、英語でお説教がされる場合、もし阿弥陀さんをイエス・キリストに置き換え、浄土を Kingdom of God に置き換えると、それはもうほとんどキリスト教

のお説教と大して変らないものになってしまう。それで、アメリカ人が真宗の寺院に来て、キリスト教の焼き直しみたいなことで魅力がない。その点は、キリスト教と非常に違うところがあるものですから、どの禅センターへ行っても、殆ど九十五パーセントは日本人以外のメンバーによって占められています。それに対して真宗のお寺に行くと、殆ど九十五パーセントは日系人で、それ以外でお参りをする人は、最近は何れに増えているようですが、ほとんどいません。

それでは、浄土真宗というのはキリスト教と変わらないのかというと、私は非常にちがった所があると思います。そこをはっきりさせなければ、浄土真宗はアメリカでは日系人のための内地からの出店みたいなものに終って、本当に世界の将来に貢献しようような宗教にはなっていないのではないかと思います。それでは浄土真宗はどこが違うのか。

少なくとも二つの重要な違いがあるのではないかと思います。ひとつは、キリスト教の場合、この仲保者であるイエス・キリストは歴史の中に現われた歴史的人物であるということです。これはキリスト教の常に強調するところであって、歴史の中に神の啓示が起こった。しかも、それはただ一回の歴史的出来事であるということです。これに対して、弥陀の成仏というのは決して歴史的出来事ではなく、また成仏した阿弥陀仏というのは、決して歴史的人物ではない。それは「弥陀成仏のこのかたは、すでに十劫をへたまへり」といわれるように、歴史を超えたところで仲保者としての阿弥陀仏が成仏されたのです。といっても、それは単に神話的な出来事ではなく、衆生の歴史と深いかわりはあるものの、歴史に内在した出来事でもない。この歴史を超えた阿弥陀仏を通して初めて、我々は形なき法性のみやこに帰ることが出来るわけです。これはひとつの決定的な違いであります。

もうひとつは、ここに衆生と弥陀、私と弥陀との関わる場面があります。これは『教行信証』でいえば行巻、



信巻で説かれているところであり、宗学で行信論といわれる世界です。弥陀の召喚の勅命に應えて、罪悪深重の私が弥陀の本願力を信じて帰入する行信の世界というものがあるわけです。キリストの場合は、キリストを信ずる、'In the Name of Jesus Christ'ということですから、キリストの御名において信じ、そこで救われるということです。それはちょうど弥陀の名号を信ずることによって救われるということと相通じます。そういうわけで、この行信の世界で、キリスト教と浄土真宗とは非常に似ているわけです。

パウロやルターの言葉と親鸞の言葉は、行信という面に関して、つまり私と弥陀との関わり、私とキリストとの関わりという限りで、驚くほど似ています。つまりルターは'Sola fide'「信仰のみ」といって人間の善行によってではなく純粋な信仰によってのみ神から義とされると言います。親鸞聖人も「ただ信心を要とすと知るべし」といわれ、また「涅槃の城には信をもって能入す」と言っておられます。'Sola fide'ということと「ただ信心を要とす」ということは相通じます。

しかし、問題は信をもってどこへ能入するのかということです。仏教では、「涅槃の城に能入す」といわれています。「涅槃の眞因は唯信心を以てす」ともいわれています。この「涅槃の城」というのは「法性のみやこへ帰る」ともいわれるように法性の世界、無相空の世界であります。それに対してキリスト教の場合は、'Sola fide'によってどこに能入するのか、というと「色もなく形もましまさぬ」真空形相の世界ではなく、人格的な神がいる世界'Kingdom of God'へ帰るわけです。ここで人格的というのは、つまりそこに意志があるということです。人格の中心は神の意志'Will'であるからです。無相の空ではなく神の意志を根本とする所に、キリスト教と浄土真宗の重要な違いがあると思います。

親鸞聖人は「信は願より発すれば、念仏成仏自然なり。自然は即ち報土なり。証大涅槃疑わず」と言っておられます。行信の世界はもちろん大切ですが、行信の世界は実は願の世界、証の世界に根ざしている。そこより発している。したがって、本当の信仰は、その根が阿弥陀仏を超えて、願の所まで、証の所まで届いていなければ

ならないと私は思います。真宗では聞信ということ強調されますが、「聞といふは仏願の生起本末を聞きて疑心あることなし。これを聞という」といわれています。仏願の生起本末というのは、仏願がどうして生じたか、形なき法性法身が発願し、形をとって、方便法身になられた、即ち願成就して、阿弥陀仏になられたという、その願の成り立ちのプロセスを聞いて、疑心がないということ、それが信の中味であるわけです。だから親鸞聖人は「弥陀五劫の思惟をよくよく案ずれば、親鸞一人がためなりけり」と言われましたが、それは仏願の生起本末の全プロセスをつぶさに身をもって受けとめておられたためだと思います。結局そのように浄土真宗の場合でも根本は、色もなく、形もましまさぬ法性法身に立つ、そこに足が届くということがなければならぬと思います。そして、「往生」ということも「皆受自然虚無之身無極之体」といわれているように「虚無之身無極之体」、即ち色もなく、形もましまさぬ法性法身を「皆受ける」ということであります。

そういうことは、キリスト教の方には見られないことであって、やはり神には何らかの意味の形——創造主、贖い主、主なる神といった形——というものがある。つまり、意志をもった神であるのです。もっともキリスト教の神秘主義では形なき神との合一を説きますが、正統的キリスト教の神は無相の神ではなく、創造主、贖い主といった相をもった神であり、仲保者イエス・キリストを信じる信仰を通して帰入するものこの有相の神であります。その点、浄土真宗は仲保者としての弥陀を信ずるという意味でその根本は依然として仏教であり、大乘仏教の根本的立場を決して離れていないと言えると思います。私は単純に仏教とキリスト教、浄土真宗とキリスト教のどちらがよいというつもりはありませんが、けれども両者はこう違うということをはっきりさせておかなければならないと思います。

そういう違いをはっきりさせていくということが、むしろ真宗が西洋世界に出て行く場合に大切なことで、そこにまた、キリスト教にない救いの道ということも出てくるのではないかと思います。

どうも長く時間をとりました。有難うございました。



『海外仏教研究』研究会報告

日時：1988年11月8日(火)

場所：研究所会議室

## フランスの日本宗教研究の現状

海外仏教研究班・嘱託研究員  
フランス国立中央科学研究所研究員

J. N. ロベール

フランスにおいて仏教、特に日本仏教を専攻する人は二人か三人しかいません。このうちの一人、デニス・ジラ (Dennis GIRA) さんは去年日本印度学仏教学会のため来日されましたので御存知のことですし、それ以外にはフレデリック・ジラル (Frédéric GIRARD) という人と、アメリカで教えている二人のフランス人がいるくらいで、あまりいないのです。そこで、フランスの仏教研究全般、それにフランスにおける全般的な宗教研究の現状についてお話ししたいと思います。

宣伝になりますけど、今年、フランス語としては初めて日本の宗教を紹介するアンソロジーといえますか、選集 (RELIGIONS, CROYANCES ET TRADITIONS POPULAIRES DU JAPON, Maisonneuve et Latose, PARIS, 1988) が出版されました。その選集は、なにせフランスで行なわれることです。あまり正確な予定は立てられておらず、最終的に何冊になるかもわかりませんが、一冊目は確かに出ました。それは仏教以前の、仏教以外の日本の初期宗教についての選集になっています。その選集の編集担当者は、みなさん御存知のことと思いますが、ハルトムット・ロテルムント (Hartmut ROTERMUND) さんです。この書物は、日本の『古事記』、『日本書紀』あたりから現代にいたるまで、日本の宗教という現象のさまざまな場面を、民族・芸術は別にして、思想、文学に表れる宗教性を中心にフランスの比較宗教学者を対象に紹介しようとするものです。その一冊がやっと出版になりました。それは6月に生まれ、内容としては『古事記』、『日本書紀』、『万葉集』あるいは『魏志倭人伝』にはじまり、祝詞等いわゆる神道関係のものも紹介しています。こうしたことはフランスでははじめてのことです。英語にしましても、“Sources of Japanese Tradition” という書物を除けば、日本宗教だけを専門的に紹介するアンソロジーはあまりみかけないと思います。意外に珍しいものなのです。編集が順調に進めば、第二冊に仏教関係のもの、飛鳥、奈良、平安初期の仏教を紹介するアンソロジーを作る予定です。

こうした状況からすれば、フランスにおける日本の宗

教研究は、さかんになってきているといえます。以前にはまったく関心をもたれなかったようなことを研究する人が増えて、ある程度のチームを作れるような人数が集まり、研究が進められているのです。フランス国立学術センターの東洋学部の研究チームに、日本思想歴史研究チームというのがあります。主に日本宗教関係の人がそこに参加しています。そのチームのディレクターは、ベルナル・フランク (Bernard FRANK) 先生で、彼は平安時代の仏教、『今昔物語』を以前から研究しておられます。現在は少し方向を変えられ、日本の仏教美術史から民間宗教的な「御札」の研究をされています。日本全国の「御札」を集めて、二、三年後には、『日本御札大成』といったようなものを出版されるそうです。彼の研究は日本ではあまり注目されないものでしょうけれども、フランスではとてもおもしろい研究対象とされています。いわゆる經典では語られない「御札」の謂れ、伝説を集めようとするのです。こういった經典にも文学にも表れないものが、彼の研究では一種の一貫性をもって一冊の本にまとめられるはずで、それは仏教学でもなく、民俗学ともすこし違った方向にあります。今のフランスではこうした方向の研究が多いのです。

フランク先生の研究以外には、ロテルムント先生が江戸時代の民間信仰を研究しておられます。彼の研究素材はどこにあるのかといえますと、「包装紙」にあります。それを中心として、魔術的なものとか「御札」とか、まじないの歌とか、あるいは民間医学の小論文とかが集められます。江戸の末期に西洋医学が伝わったとき、西洋医学と伝統的な東洋医学、そしてその周辺のまじないのものが、どのようにかわり合い交わってきたのが研究されています。例えば、種痘が日本に伝わったとき、それを民間の人々に知らせるために「御札」の形とかまじないの形式を用いて予防接種の宣伝をしたということは、とてもおもしろいことですから。こうしたことは民間宗教的な関心であり、日本ではあまり研究が行なわれていないようです。しかし、フランスではそうしたところに宗教学としての興味がそそがれているのです。

さらに、同じ研究チームにジャン・ピエール・ベルトン (Jean-Pierre BERTHON) という人がいます。彼は新興宗教、特に大本教に興味をもち、論文も二、三年前に出しております。彼は今後、宗教社会学を主にして、現代日本における新興宗教の現象を追求していこうとしております。フランスでは最近“L'état du Japon”という書物が出されました。それは日本を知る辞典のようなものですが、たいへん好評を博し、ベストセラーになりました。彼はその書物で宗教の問題を担当しました。彼の役割は今たいへん大きくなっています。彼を通して、新聞記者や経済学者等いろいろな分野の人が日本の事情を知ろうとしています。この書物は現代マスメディア、マスコミ、それに大学でも参考書のように扱われています。ジャン・ピエール・ベルトンさんは現代の宗教、主に十九世紀からの新興宗教しか扱っておらず、その意味では残念なことですけれども、同時に彼によって現代日本における宗教の重要性が認識されたという意味ではたいへんおもしろいと思います。

この方も同じ研究チームに所属しているのですが、宗教社会学者でシモヌ・モクレール (Simone MAUCLAIRE) さんがいます。彼女は自分でも宗教学者ではないとおっしゃっていますが、社会学と民俗学と宗教学をまぜた非常に難しい分野を研究されています。彼女は現在の日本の農村を対象として、できるだけわかる範囲での歴史と現代宗教生活とを含めた広い意味での社会生活というものが、どんな風に関わりをもち、あるいは混同しているかという点を研究しています。彼女の最初の研究は平安時代の宗教及び社会を対象としていました。次第に関心が現代の日本に移ってきて、今では自分が平安時代の日本について行った研究方法をそのまま現代日本の宗教及び社会生活に対応させようとしているのです。

彼女に近いところを研究している人にロランス・カイエ (Laurence CAILLET) という女性がいます。以前、奈良東大寺のお水取りについての博士論文を書きましたが、当時は神仏混合という現象に興味をもっていたのです。現在は新興宗教、あるいは日本のあちこちに現われてまいりました新興宗教を元にした新事業、企業があるようですが、そういったものにも興味をもっています。例えば彼女が研究フィールドにしたものに、全国に美容院を作った新興宗教があります。つまり企業と新興宗教の関わりというものを研究しているのです。それは社会学でありながら、ヨーロッパでもさかんに議論されるようになった日本の経済大国化の原因についての一考を与えるものでもあります。モクレールさんやカイエさんの関心の一つは、日本の経済と新興宗教の関わりにあるのです。そこで、経済生活の中の宗教的な要素の重要性を浮き彫りにしようとしているのです。これは宗教学でもなく社会学に近いものといえるかもしれませんが、非常

に興味深いものであり、日本ではこうした研究がどの程度までされているのかわかりませんが、これから期待できる分野だと思えます。

われわれの研究チームとは少し違ったところに属しているフォンソワ・マクシーという人は、今のところフランスにおける唯一人の神道あるいは古代日本宗教の研究者です。彼の博士論文は古代日本の葬式をテーマにしており、その論文はすでに本になって出版されています。いままであまり関心をもたれなかった古代日本宗教史の参考書になりました。彼は東洋学の研究者で、東洋学における日本宗教の歴史の講義を担当しています。これら七人の研究者は、仏教だけでなく日本の宗教を研究しているのです。

それ以外に日本の仏教を研究している人では、先ほど申しましたようにフレデリック・ジラルド (Frédéric GIRARD)、デニス・ジエラ (Dennis GIRA)、それにフランス人で米国で教鞭をとっているアラン・グラパール (Allan GRAPARD) とベルナル・フォル (Bernard FAURE) さんがいます。皆、それぞれに日本的なものにとらえかたを研究している人たちです。ジラルドさんは華嚴宗の研究者で、主に鎌倉の旧仏教復興運動に興味を持ち、明恵上人の『夢の記』を仏訳して来年の初め頃に膨大な著作を出す予定です。デニス・ジエラさんは、皆さん御存知のように、親鸞聖人の研究や浄土教の研究をしています。アラン・グラパール氏は、真言および日本の密教を、ベルナル・フォル氏は禅宗、主に日本の禅と中国の禅の思想の両方を研究しているのですが、日本側では道元禅師の禅宗関係の書物の翻訳をしています。先日『正法眼蔵』の部分的な翻訳をだしましたが、これからますます重要になる研究を続けています。彼らのやり方は昔のようなサンスクリット語、チベット語や中国語を中心とした仏教学ではなく、その日本の伝統と中国の伝統の間の仏教の発展史を研究しようとしているのです。皆、サンスクリット語やチベット語は知らず、漢語、古代中国語そして日本語を使います。例えば密教をやっているグラパール氏などは、チベット語を知らないのでは不条理だと言われたことがあるのですが、彼はそれに反抗して、一つの宗教的な伝統としてその伝統の発展史を勉強しようとするれば、サンスクリット語やチベット語はかえって差障りになると主張します。つまり、ある一定の文化圏における思想史を勉強しようとする場合、インドなどにさかのぼろうとすることはかえって誤解を生む可能性があるというのです。具体的にいえば、天台における止観とパリー仏典やインド・サンスクリット仏典に出てくるシャマタ・ヴィパシャナとを比較して、天台の観をヴィパシャナと理解したら誤りになるように考えるのです。

こうした現状はフランスの研究の教育問題にもかかわっています。いまのフランスには仏教学をまとまって

教えるところはコレージュ・ド・フランス (Collège de France) のアンドレ・バロー (André BAREAU) 先生のところしかないのです。研究者はまず言語を勉強して、その後、日本や中国に留学して仏教学を積極的に学ぶのです。総合的な仏教学を教育する場合は、ローザンヌ大学にジャク・メイ (Jacques MAY) 先生が開講しておられます。しかし、先生のところには学生が一人もいません。韓国人が一人いるだけです。ですから、フランスには小乗仏教を専攻するバロー先生以外大乘仏教がないともいえます。わたしの講義しているソルボンヌ大学内にある EPHE 高等学院の第五部、宗教学部にも、わたしの自由講義として、いわゆる講師としてやっている中国仏教史以外には宗教学部にも仏教というタイトルの講義は一つもありません。わたしはそのディレクターではなく講師にすぎないのです。ここはフランスで宗教学を代表する唯一の教育機関なのですが、それでもこうした状況なのです。

今年になってようやく仏教学のポストを作ろうということになったのですが、仏教学というと広すぎて、その中のどんな仏教学をやるかという問題がでてきます。中国関係には道教や儒教の講義がありまして、そうした先生からは中国仏教をやるかという意見が出ます。またロテルムント氏あたりからは日本仏教学を、アン・マリー・ブロンドー (Anne-Marie BLONDEAU) 先生はチベット仏教にしようかと主張します。そうしたさまざまな意見が出て、ようやく日本の仏教から始めようということになりました。現在は正式に文部省に日本仏教のポストを申請しているところです。

最初の仏教学のポストが日本仏教というのは、ある意味で不思議なことかもしれません。今のところ中国仏教やチベット仏教を担当する人がいないということ、それに先ほど申しましたように、現代日本の社会と宗教とのかわりを勉強しており、現代日本を知る手段の一つとして重要視されたということなのでしょう。とにかくそれは申請され、現在文部省の回答を待っているところです。

先の話に戻りますが、ロテルムント先生を中心として編集されたアンソロジーは、同じ EPHE の第五部の中にある CERTPJ (日本の民間宗教の史料及び研究センター) で行われた研究の成果です。そこはまったくの研究機関であって教育機関ではないのですが、そこでも昔は年一回資料集を出していました。いまは休憩して、アンソロジーに専念しています。そうしたアンソロジーの関係者が先ほど申しました人たち以外にもいます。そのひとりにはジョゼフ・キブルツ (Josef KYBURZ) 氏で、先に述べました CNRS (国立科学研究所) の研究チームに属しています。彼は完全な民俗学者です。この前フランスで出版になったばかりの彼の著作は、日本の農村についての研究書で、彼は信州のある農村に生活して農

村生活のすべてを描写しようと試みました。四季の移り変わりに従って、農村の社会制度から政治的な事柄までもを総覧しようとしたもので、そうした意味でかれは完全な民俗学者ではありますが、彼もまたそのアンソロジーに関わったのです。ですから、アンソロジーに関して非常に多様な研究が行なわれているといえます。このように CERTPJ という組織を中心として、皆それぞれの分野で独立して研究を続けています。独立した研究は再び共同の作業で集約されて、具体的にはそうしたアンソロジーや資料集として提出され、もっと広範に紹介されていくのです。

具体的な結果としては、すでに御存知かも知れませんが、フランスの ENCYCLOPAEDIA BRITANNICA にあたる ENCYCLOPAEDIA UNIVERSALIS (フランス百科大辞典) というものがあります。その別巻としては、この十月に宗教のアトラスが出ました。そこでは初めて、日本の仏教、日本の宗教、あるいは神仏混合とか日本仏教美術史などの項目が設けられました。わたしはそこに日本の仏教と中国の仏教について、ごく短いものを書かせてもらいました。他にはフランク先生が「御札」をテーマとしたものをお書きになりました。これほど広い範囲に日本の「御札」のことが紹介されるのは初めてのことでないでしょうか。さらに、わたしがちょうどいない時に、この宗教アトラスの出版を祝ってさまざまな座談会が開かれ、多くの参加者を得、それを機会に日本の宗教についてより広い分野の人に紹介ができたのではないかと思います。

こうした事情からして、日本という国に対する興味は、出版界にも学界にも非常に高いものがあるといえます。わたし自身にも、日本の宗教に関する興味は高まるばかりです。たとえば、わたしは今、カトリック関係の出版社に、日本の宗教の翻訳すべき書物のリストを作るように頼まれています。こうしたカトリック関係の出版社でも、既に中国の宗教やアラブの宗教、それにユダヤ教などの書物をたくさん出版しており、これから日本の宗教、日本の仏教を紹介していこうとしているのです。これらは今までのフランスにはまったくなかったような新しい関心です。しかし、フランスで日本の宗教に興味をもって研究している人はわずかに十人ほどにすぎないですから、出版社から百科辞典などを依頼されても間に合わすのが難しい状況です。来年あたり再版になる ENCYCLOPAEDIA UNIVERSALIS で、わたしは日本の仏教という項目を書くように依頼されました。25年前にその項目を担当した方は森有正先生です。彼は特別に日本仏教学を研究したわけではないのですが、特に晩年、道元などに興味をいだいていた関係でそれを引き受けられたらしいのですが、やはり書き直す必要が出てきたようです。

このことは、今の日本の宗教とか日本の仏教の研究に

新しい時代が訪れたということの意味しています。いままでもわれわれは、それほど多くの人が関心をもたないであろうと思われる分野を研究しているつもりでしたが、現在、意外にそうした分野への興味が増大していることを実感するのです。それに応えていこうとすることは、楽しみの一つでもあり、なかなか難しいことでもあります。

さらにもう一つの出版社で新しく全世界の宗教を簡単に紹介するシリーズが出ています。最初に出ました四冊は日本や東洋に関係するものではなく、すべてキリスト教関係です。これから出版になる四冊の中に、禅が予定されています。わたしもアドバイスを頼まれたのですが、わたしとしては禅を最初にやることには反対しました。禅はたいへんおもしろい対象であるとは思いますが、最初から禅を紹介するのは無意味じゃないかと、むしろ仏教、あるいはインド仏教や一般的な仏教の歴史が最初に紹介されるべきであると思うのです。しかし出版社では禅のほうが人気があるということで、そこから入っていきなうです。したがって、禅とはいいながら、一般的な仏教という意味でとらえられているようで

す。しかし、フランスには仏教全般について専門的に多くの知識をもっている人は少なく、担当者の選択が難しいようです。わたしもやかましく頼まれているのですが、禅などはよく知りませんから固辞しているところで

す。そうした意味では不十分ではありますが、今まで全然関心をもたれなかったところまで、日本の宗教の勉強や研究がすすんできています。これから必要とされるのは、きちんと日本の宗教や仏教を専門的に講義する機関、それに、もっとまとまった形で日本の宗教を紹介する書物のシリーズだと思います。

ロテルムント先生が提案したアンソロジーの出版は、たいへん興味深い第一歩であり、これから中心的な役割を果たしていくのではないのでしょうか。われわれもどこまでいけるかわかりませんが、少なくとも六冊ぐらいの書物は出したいと考えています。現在一冊目が出ましたから、二冊目の予算を申請しているところです。これから分担して、翻訳したり注釈を書いたりすることが、来年、再来年の課題となっています。

『海外仏教研究』報告

〈指定研究〉

## 第2回国際ダルマキールティ学会 に出席して

海外仏教研究班・チーフ  
本学教授

長崎法潤  
(インド学)

### [1]

インドの仏教の学僧ダルマキールティ (Dharmakīrti、法称、600-660頃) を中心にした仏教認識論、論理学の学会、第2回国際ダルマキールティ学会 Second International Dharmakīrti Conference が1989年6月11日～16日ウィーンで開かれた。ヨーロッパ、アメリカ、オーストラリア、インド、日本などから参加者50名ほどの小さな学会であったが、各国の学者と親しく意見交換をする時間が十分に与えられ、有意義な6日間を過ごすことができた。

今回の学会を開催したウィーン大学のシュタインケルナー (Ernst Stein Kellner) 教授は、ダルマキールティ研究では世界の第一人者である。1982年、教授が京都大学の客員教授として京都に滞在しておられたとき、梶山雄一教授によって第1回ダルマキールティ学会が7月16

日、17日の両日、京大会館を会場にして開催されている。

インド仏教における一人の学僧を中心にした国際学会は、他にその例がない。その意味でダルマキールティは最も注目される学僧と言うことができるが、それは二つの理由によると考えられる。

第1の理由は、ダルマキールティはディグナーガ (陳那、480-540頃) によって大成された仏教論理学 (因明) をさらに発展させた偉大な思想家であり、後続の学僧たちに多大な影響を与えている。彼の学説は、他学派においても注目され、他学派の論書に非常に多く引用されている。

第2の理由は、ダルマキールティ研究は仏教研究の他の分野にくらべ最も立ちおくれ、近年注目されるようになった。それは、彼の論書は、『ニヤーヤ・ビンドウ』を別として、そのサンスクリット原典の多くは、過去30

年くらいの間に刊行され、ようやく本格的な研究が可能になったからである。

近年、ダルマキールティ研究を中心にして仏教認識論、論理学分野の研究には目ざましい発展が見られる。今回のウィーンにおける学会は、文献資料、哲学、宗教、他学派との交渉関係、その他多くの観点からダルマキールティ研究をさらに促進させるために開かれたのである。

## [2]

学会はウィーンの森の中にある Bildungshaus Neuwaldegg を会場にして開かれた。もともと貴族の宮殿であったが、今は宿泊設備のある美しいセミナーハウスになっている。市電の終点ノルワルデッグから森の坂道を8分ほど登ると会場に到着する。

6月11日午後4時ごろ学会登録をすませると、ライデン大学のフェッター (Tilmann Vetter) 教授が一足先に到着していて、もう森を散策してきたと言っていた。ウェイマン (Alex Wayman) 教授も元気な姿でやって来た。次々と到着する参加者と挨拶をかわしているところへ、シュタインケルナー教授が姿を見せ、お互いに再会を喜びあった。その夜6時から地下の食堂で夕食会が開かれたが、明日からの学会を前にして、早々とそれぞれの部屋にもどった。

翌朝、小鳥のさえずりを聞きながら目を覚ました。木立を通して窓にさし込む朝日がすがすがしい。9時に二階の美しい一室を会場にして学会がはじまった。

最初に、今回の学会の会長をつとめるシュタインケルナー教授による歓迎の挨拶があった。まず、1982年に京都でダルマキールティ学会が開かれたことの経緯について語られた。続いて、ダルマキールティ研究については、この4分の1世紀の間に飛躍的に発展し、とくにテキストの出版、研究には著しいものがある。Vadanyaya が近くウィーンで出版される、など研究について言及し、最後に、このウィーンでの第2回大会に多数の参加者が遠くからおいでになったことに対し心から歓迎する、と結ばれた。

続いて研究発表に入った。全体の発表は、文献研究、認識論、論理学、言語と概念、哲学的立場、その他、の順にまとめられている。最初にチベット学のルエグ (David Seyfort Ruegg) 教授 (ハンブルグ大学) が、ツォンカバをもとにした中観思想と論理学との関係について発表した。

David Jackson 博士 (ハンブルグ大学) の発表は、1987年、パトナの Bihar Research Society で調査したチベット蔵外文献に関する内容である。その中にダルマキールティの『プラマナー・ワールティカ』(以下PV) に対するチベットの重要な注釈、複注が三種類あることを指摘した。

Brendan S. Gillon 教授 (トロント大学) は、PV 自

比量章におけるサンスクリットのシntaxスについて発表した。従来の文法学を無視した研究であると、インド人学者たちから批判意見が続出した。インドの Mangala R. Chinchore 女史 (プーナ大学) は、avisamvāda (人を欺かない [知])、ajñātarthaprakāśa (知られない対象の認識) という点から認識手段の問題をとりあげた。

Claus Oetke 教授 (オーストラリア国立大学) は、ダルマキールティの svabhāvapratibandha (本有的関係) と svabhāva (本質的属性)、kārya (結果)、anupalabdhi (非認識) をとりあげて論じた。

コペンハーゲンのリントナー (Christian Lindtner) 教授は、PV 量成就章における意味不明瞭な最初の6偈をとりあげ、その歴史的背景、作者の個人的理由を考察した。教授はもともと中観思想の学者であるが、近年、仏教論理学関係のサンスクリット写本の研究にたずさわっている。今回の発表もそれにもとづくものである。教授は、Pramāṇaviniścaya のサンスクリット写本を手に入れ、中国人学者 Hu Haiyan (胡海燕) 女史とともに校訂している、という噂である。しかし、北京にその写本があるらしいが、まだ見たことがない、と教授も Hu 女史も言っていた。

第1日目の最後は Georges Dreyfus 氏 (アメリカ) の発表で、ダルマキールティの認識手段の定義をめぐるチベットの mkhas grub の解釈についてであった。

発表終了後、オーストリア科学アカデミー主催のレセプションに出席した。ウィーンの中央にそびえるステファン大寺院の前を通り、ローテントウムルム通りをしぼらく行って右に折れるとベッカー通りに入る。古い街の一角に科学アカデミーのビルが建っている。二階に立派な会議室と大きな応接室があり、天井には美しい壁画が描かれている。ドイツの画家の筆とのことである。レセプションにはインド学のオーバーハンマー (Gerhard Oberhammer) 教授 (ウィーン大学)、アルタイ語のメンゲス (Karl H. Menges) 先生、シュタインケルナー教授夫人なども顔をだしていた。ワインを飲み、ウィーン風に美しく飾られた食事をいただきながら、にぎやかな懇親の夕が続いた。

帰途、ウィーン大学に留学中の小野基氏 (筑波大学) の案内で、日本から出席した数名の方々とチベット学仏教学研究所 Institut für Tibetologie und Buddhismuskunde を見学し、コンピュータを利用した研究方法についての説明をもらった。

## [3]

6月13日の発表は次の諸氏によってなされた。

Eli Franco (Trobe 大学、オーストラリア)、岩田孝 (早稲田大学)、B. S. Gillon (トロント大学)、稲見正浩 (広島大学)、谷貞志 (高知工業高等専門学校)、Marek

Mejor (ワルシャワ)、Tom J. F. Tillemans (ローザンヌ)、Ernst Steinkellner。

これらの諸氏のうち、Marek Mejor 博士が集量論とPVとのチベット訳年代について発表し、他はすべてダルマキールティの論理学に関係する発表であった。岩田孝教授は、Pramānaviśāyā IIIにおける三種の論理的理由 svabhāva (本質的属性)、kārya (結果)、anupalabdhī (非認識) をとりあげ、B. S. Gillon 教授はPV自比量章をもとにして tadātmya (同一関係) と tadutpatti (因果関係) について論じた。稲見正浩氏は、排除されるべき pakṣabhāsa (間違った主張) をとりあげ、ディグナーガからダルマキールティまでの展開について発表した。谷貞志博士は、プラサンガ(サーダナ) 解釈と sadhyaviparyaye bādhakapramāṇa への変換の問題をとりあげ、ダルマキールティ論理学と刹那滅論証についてくわしく論じた。

シュタインケルナー教授は、Vadanyāya をもとにして、論理的理由 (hetu) としての svabhāva (本質的属性) の定義をとりあげ、ダルマキールティ論理学の本質について論を展開した。それによって、今までジャイナ学僧によって考えだされたといわれる antarvyapti (内遍充論) は、その語を用いていないが、ダルマキールティの独創と考えられる、と述べた。

6月14日の午前中、大前太(九州大学)、桂紹隆(広島大学)、T. E. Meindersma (ライデン)、Ole Holten Pind (コペンハーゲン) の諸氏の発表があった。大前太氏は、Vedāpauruṣeyatra (ヴェーダは啓示であり、作者たる人間をもたない) というミーマーンサー学派の主張に対するダルマキールティとシャーントラクシタとの批判をとりあげた。

T. E. Meindersma 博士はPV IIの paralokasiddhi におけるアポーハ論をとりあげた。博士は薬学の研究者であり、古代インドの医学書『チャラカ・サンヒター』の研究からインドの論理学研究に入った学者である。O. H. Pind 博士もアポーハ論を論じた。桂紹隆教授もアポーハ論をとりあげる予定であったが、svabhāvapratibandha (本有的関係) というダルマキールティ論理学の中心問題に変更し、最初に教授が発表して、それにもとづいて討論することを提起した。これは、tadātmya (同一関係) と tadutpatti (因果関係) とであり、論理的必然性を決定する根拠である。ダルマキールティ研究者にとって最も関心のあるテーマであるので、活発な意見交換がかわされた。

プログラムに午後3時から「Erich Frauwallner 回想散策」と書かれている。ダルマキールティ研究の先駆者としてすぐれた業績を残したウィーン大学の故フラウワルナー教授を回想しながら、参加者全員でウィーンの森を歩いた。雑草が手入れされたような美しい森を歩きながら、いろいろな人たちと話しあった。ハンブルグ大学

で唯識を学んでいる韓国人留学生チェ ジョン ナム(崔鍾男) 君、シュタインケルナー教授のもとで仏教論理学を学ぶために北京から来ている Yang Lu (陸揚) 君、ゲッティンゲン大学で学び、現在リントナー教授のところまで研究している Hu Haiyan (胡海燕) 女史、ウィーン大学の大学院生たち、日本人留学生たち、皆それぞれの国における仏教研究の将来をになう人たちである。2時間ほど丘陵を歩き、心地好い疲れを感じるところ、坂を下り一軒の居酒屋に入った。ホイリゲという自家醸造の新しいワインを飲むと、疲れのためか酔がまわり、皆さかんにダルマキールティについての議論をはじめた。

#### [4]

研究発表の最終日6月15日には広く仏教認識論、論理学関係の発表がまとめられていた。インドの Karuṇesh Shukla 教授(ゴラクプール大学)は、今回の学会をたたえる自作のサンスクリット詩を朗読し、続いてダルマキールティ論理学の歴史的背景について広い立場から論じた。狩野恭氏(京都大学)は、自在神の存在をめぐるPV II 12 ad をとりあげ、正理学派に対するダルマキールティの批判を考察した。Alex Wayman 教授(コロンビア大学)はダルマキールティとヨーガチャーラの種子説について、生井衛教授(高野山大学)はダルマキールティと後期論書における paralokasādāna について、それぞれ論じた。Michael Torsten Much 博士(ウィーン大学)は、nigrahasthāna (論争における負となる過失) に関してディグナーガの説と思われる断片が Uddyotakara の論書にあることを指摘した。

午後の発表は梶山雄一教授からはじまった。仏教における最初期の論理思想を説く『方便心論』をとりあげ、その作者について、ナーガールジュナとの関係もありうるとする見解をくわしく論証した。筆者は、「ディグナーガ以前の仏教論書における知覚」という題で発表した。

『方便心論』『瑜伽論』をとりあげ、ディグナーガ以前の仏教論理学において知覚の中に世間智が説かれていたことを明らかにしようとした。森山清徹氏(仏教大学)は後期中観とダルマキールティ、M. R. Chinchore 女史はダルマキールティの Vadanyāya に対するウダヤナ後の正理学派の反応、についてそれぞれ発表し、研究発表のすべてが終了した。

#### [5]

研究発表はなかったが、シュミットハウゼン(Lambert Schmithausen) 教授(ハンブルグ大学)、フェッター教授、Karin Preisendanz 女史(ベルリン自由大学)も参加し、司会者をつとめたり、討論に加わったりしていた。その他、日本から白崎顕成教授(神戸女子大学)、ハンブルグ大学、ウィーン大学の大学院生、外国人留学生などの参加があった。筆者の大学院ゼミで学んでいる原田

高明君も参加し、貴重な体験を積んだ。

研究発表以外に、プログラムに組み込まれていなかったが、ダルマキールティ研究の現状について、インド、日本、西洋諸国にわけて報告がなされた。これは、急に参加者の提案によってなされ、資料の準備がなかったので、多少厳密さを欠いていたが、ある程度の理解ができた。日本におけるダルマキールティ研究、仏教論理学研究は高い水準にあるが、ほとんど日本語によるものであり、残念ながら外国人研究者に知られていない。学問の国際化のために、日本語の論文に英文レジメをつけることが必要に思われる。これは、仏教論理学のみならず、すべての仏教研究において言えることである。

さて、今回の国際ダルマキールティ学会は、多くの点で今後の研究方法、研究分野を考えるための有意義な機会を作ったことになる。まずダルマキールティ思想の全貌を解明することが第1である。さらに、チベットにおけるダルマキールティ論書の注釈類の研究、他の仏教論書との関係、他学派との交渉関係など、ダルマキールティ研究の分野は広大である。

今回の学会に参加して強い肝銘をうけたことは、ヨー

ロッパの仏教学者、とくに大乘仏教の研究者はすべて、インド仏教における仏教論理学、ダルマキールティの重要性を認識し、多大な関心をもっていることである。仏教論理学は仏教学者にとっての常識になっている。

ところで、現在の日本における仏教研究については、専門分野の細分化が進み、仏教論理学は特定の研究者だけの研究分野になっている。もともと日本では仏教研究者は、仏教のあらゆる分野を広く視野に入れて、自分の専門分野を深めていた。そのため、自分の専門分野が仏教全体の中に常に位置づけられていた。仏教研究には、それは大事なことである。仏教論理学、因明も、その意味で、日本では古くから学ばれていた。今回の学会でダルマキールティに示すヨーロッパの仏教学者の強い関心に直接触れながら、筆者自身の学問に対する反省として、仏教研究における広い視野の必要性を実感した。

学会の最後に、シュタインケルナー教授の閉会の言葉、教授に対する梶山雄一教授の謝辞があって、すべての日程が終了した。翌朝の朝食をすますと、再会を約束して、それぞれ参加者が去って行った。

『海外仏教研究』報告

〈指定研究〉

## 国際真宗学会第四回大会に出席して

海外仏教研究班・研究員 箕浦 恵了  
本学教授 (西洋哲学)

国際真宗学会 (International Association of Shin Buddhist Studies) の第四回大会が1989年8月1日から3日までハワイ・ホノルルの本派本願寺別院を会場にして開催された。「真宗の広がりゆく世界」というテーマを掲げて開催されたこの会議には、ドイツ、オーストリア、スイスのヨーロッパ諸国をはじめ、ブラジル、アメリカ合衆国、カナダ、日本からの参加者があり、真宗の教義・信仰・実践について研究発表・討議が8回のセッションにわたっておこなわれ、また「仏教の倫理」というテーマの Public Forum がハワイ大学の St. John Hall においておこなわれ、なかなか盛会であった。この会議での研究発表や討議の特色は、「真宗と倫理」という実践の問題に多大の関心を寄せたものが多く、いきおい会議の焦点がその問題に絞られたかの観があったことである。いま世界各地のそれぞれの文化圏において、親鸞の教えを学び、真摯な研究者であるとともに、またみずから念仏者であろうとする人々の、真宗学にたいする国際的な関心のありかが示され、世界的な思想の場において親鸞の教学を聞思することの重要性が痛感され、

意味深い会議であった。

会議の開会式は学会長 Prof. Masatoshi Nagatomi (永富正俊 ハーバード大学教授) の開会挨拶や Prof. David Chappell ハワイ大学教授の基調講演などに始まり、また開教百年を迎えたハワイの本派本願寺の津村淳誠師の歓迎挨拶があって、師は東西文化の地理的中間点にあるハワイこそその融合点になる可能性をもっており、この地においてこの学会が開かれることの意義を強調して挨拶された。Prof. Nagatomi 学会長は、二年前のカリフォルニア・パークレー会議 (1987) を回想しつつ、今日、真宗学は新しい局面にたっていること、すなわち、この学は今やさまざまに異なった諸外国の宗教文化圏において、またそれを通じて、親鸞の宗教的洞察の本質を明確に把握する協同の努力をなすべきであり、したがって国際真宗学会の文脈において言えば、真宗は「国際的」ということ、すなわち、異宗教間交流 Inter-religiosity を尊重しつつ、自・他の対話的協同をおこない、宗教的宇宙あるいは信仰の世界的共同体の一員にならなければならないことを強調して講演された。

氏はこの講演において、プロテスタントの神学者カール・バルトが真宗を評価し、真宗をプロテスタンティズムに比することのできる完全なるものと語ったその時代精神に言及し、あるいはまた西谷啓治先生の『宗教とはなにか』に言及して、真宗学の新たな方向を見定めようとする情熱を披瀝され、感銘深い講演であった。

第一セッションの発表者は西ドイツ・マールブルク大学の Prof. Michael Pye (マイケル・パイ教授) で、The source and direction of ethical requirements in Shin Buddhism という表題の発表であった。パイ教授は英国に生まれ、ケンブリッジ大学に学び、現在はマールブルク大学の宗教学の教授で、日本の宗教史に関心を持ち、富永仲基『出定後語』の研究に力を注いでおられるということをお聞きした。パイ教授の発表は、その表題の通り、真宗における倫理的要求の根拠とその方向とを考究しようとする内容であった。そこに提起された問題を要約すれば次のようである。

浄土真宗の救済は阿弥陀仏の本願力によるものであるから、自力作善の行をたのむ余地はない。そのため親鸞聖人の著作のなかには、人生かく生きるべしという処世の厳密な規則は体系的に示されていない。しかしこのことは親鸞の思想に倫理が欠如していることを意味するのではけっしてない。「たすけられまいらせて」という救済の信心はその恩徳に対する「感謝」として応答されるが、この「報恩謝徳」は実生活において他者に対する行為に深い影響を及ぼす。さらにまた、親鸞の結婚によって象徴されるように、人生は日常の世間的実生活において生きられるべきであり、阿弥陀の本願による救済はあらゆる生業に携わる一切衆生に対して開かれている。これら二点の相互連関から、日常生活における道徳的に望ましい振舞は真宗の信徒にあってはそうあるのがあたりまえだとする自然な期待がずっと今日まであった。したがって倫理が要求されるのは他力救済の利益に与けしめられた人においてである。気ままな、非道徳的行為は原理的に親鸞の教えに一致しない。しかしこのことは、いつでも十分に了解されたのではない。それは『歎異抄』13条の「葉あればとて毒をこのむべからず」という消息を引いての論義をみれば明らかである。「本願ほこり」の邪執に陥る危険はキリスト教の伝統における antinomianism (道徳不要論、キリスト教徒は神の恵みによりすべての道徳律から解放されているという主張) に比して論じられよう。しかるに『歎異抄』13条の論義は、いわゆる道徳主義 moralism と呼ばれるべきもの、すなわち「持戒・持律にてのみ本願を信ず」という主張に対して向けられたものであるから、倫理の真宗的理解は antinomianism と moralism とのあいだで対論的に遂行されなければならない。この議論は真宗思想における倫理的命法の本性と構造とを明示するものであるから、この点にもさらに言及しよう。

こうした事柄が解明されても、しかしなお問題が残る。すなわち、「全くの倫理無効観に基づく宗教経験はどのようにして特定の行為的要求に至るか」、とか「かかる要求は真宗に特有のものであるか」、「それらの要求は不変のものか、改変可能か」、また「それらの要求はどの程度まで地域の文化によって限定されているか、それとも普遍的か」、そうして最後に「特定の倫理的要求は、救済と人間的努力とのあいだの決定的断絶を曖昧にすることなしに、どのように課されることができるか」、というような問題である。こういった問題は、たとえ今ここで十分に答えられないとしても、真宗における倫理の根拠のみならずその方向についても考察しなければならないという必然性を示している。

以上のような問題提起のあと、ただちにパイ教授は清沢満之の「倫理以上の安慰」(in *December Fan*, tr. by Nobuo Haneda) に目を向けて、真宗の倫理的要求を特徴づける困難は清沢満之の著作のなかに根本的な形であらわれていると言う。清沢においては寂靜主義 (quietism) と道徳的責任との緊張関係はまったく明白である。倫理的二者択一の苦悩に対する清沢の解決は他力への超出である。「一切を如来に任せ奉りて、その導きたまふままに従はねばならぬ。かくなりた所で、始めて倫理以上に大安心の基礎が立つ」、「全く自我を捨て、一心を挙げて、如来海中に投じた上は、凡ての事がみな如来威神力の所為となるから、是非善悪の区別は更になく、唯だ威神力の活動を見るばかりである」、と清沢は言っている。こうした清沢の理解は『歎異抄』の趣意に沿うものである。しかし清沢において、他力への超出によって得られた宗教的自由は、特定の倫理の明確化の棄却という実に多大の代価を払って購われたものである。倫理に対するこのような態度は時代の道徳的慣習の無批判な容認を許すことになる。なるほど恣意的な不道徳や罪さえも、善悪を超えた宗教的感応において免れていることは容易に見てとれる。しかし清沢満之においてそれほど明瞭でないのは、明確な積極的倫理的態度がどこに位置づけられ展開されるかという問題である。清沢によってわがものとされた信仰についての徹底した見方、そうしてそれは一般に真宗の特質でもあるが、それを十分に考慮しつつ上記の問題の究明がなされなければならない、とパイ教授はいう。

パイ教授はこのように清沢満之の『倫理以上の安慰』に批判的疑問符を付した上で、真宗の成立期にまでさかのぼって「造悪無碍」と呼ばれた異義に目を転ずる。「造悪無碍」の邪義を唱えた放逸無慙の徒とそれに対する道徳主義の主張は親鸞によって否定された。この「造悪無碍」とキリスト教における antinomianism の異端との類似は興味深い。この antinomianism とは、神の恵みによって救済されているキリスト教徒は道徳法 (律法、nomos, torah) の遵守に縛られないという見方を意味す



る。パウロのすぐれて対論的なアプローチは実行され得ない律法から人を解放し自由にしようと努めるものであった。律法の存在は、パウロによれば、違法や罪が増し加わるための前提である（ロマ書 5, 20-21）。「恵みが増し加わるために、私たちは罪の中にとどまるべきか」とパウロは問うているが、そう問うたのは、「否、絶対にそんなことはない。罪に対して死んだ私たちが、どうして、なおその中に生きていられるでしょうか」（ロマ書 6, 2）とひたすら主張するためであった。しかるにパウロのこの教えが正しく理解されなかったということは注目に価する。パウロが強調したのは、人間の不正は神の義を明らかにするためであり、人間の偽りは神の真理を明らかにするためであるということであった。もしそうなら、「なぜ私がお罪人として裁かれるのでしょうか。善を現わすために悪をしようではないかなぜ言うてはいけないのか」（ロマ 3, 7-8）という問いが生ずる。

誤ってパウロに帰せられたこの言葉と『歎異抄』13条との類似は著しい。「悪をつくりたる者をたすけんという願にてましますばとて、わざと好み悪をつくりて往生の業とすべき由」を言った人に対する親鸞の答えは、「業あればとて、毒を好むべからず」であった。それは編者唯円が言うように、「かの邪執をやめんがためなり。全く悪は往生のさはりたるべしとはあらず」ということであった。『歎異抄』13条にみごとに示されている救済と倫理との関係がひとつの対論的な見方であるということとは強調しておかなければならない点である。

『歎異抄』13条の趣旨は新しい道德主義、すなわち阿彌陀の本願によって救われているのであるから、けっして罪を犯さないようにすべきであるという道德主義に対する用心である。このような道德主義の見方はやがて本願の救済に対する不信を含意する。「造悪無得」に対抗した善鸞の新しい道德主義を親鸞がきびしく否定したゆえである。信心は道德に基づくものではない。また非道德も信心の基盤ではない。特に往生のたねとするためわざと好んで造られる悪は信心の基盤であることはけっしてない。しかるに信心の生活の成果は道德的であることが期待される。アクグスティヌスが「神を愛せよ、そうして汝は汝の欲することをなせ」と言い、また蓮如が「仏法の上より世間のことは時に随ひ相働くべき事なり」（御一代聞書 157）と言っているが、相似たこれら二つの表現は上記の線に沿うものである。

宗教的信仰における倫理の根拠から倫理の実践的内容へ直ちに飛躍することは時代の慣習に、深い熟慮もなく、ただ黙って従うという危険なしには済まない。倫理の根拠には状況を変えるために適用しうる細目にわたっての教示は含まれていない。それゆえ信仰における倫理の根拠と実生活における実践的要求との間の仲介の見通しを準備する倫理の方向づけ、あるいは一般的定位が重要である。しかるに、真宗にふさわしい倫理を定位するため

には、仏教の全般的な展開においてその占める位置を考慮することが必要になるであろう。このように論を進めて、パイ教授は、より広い仏教倫理との関連の中で真宗倫理の位置づけを試みるため、仏教の倫理的思考の三つの展相に注目する。

第一の展相は原始仏教のそれである。仏陀の足跡をたどりつつニルヴァーナに到達しようとする出家者たちにとっては、道德的行為は特に重要な意味をもつほどのものとは考えられなかった。道德的行為はただ暗黙のうちに前提されていたにすぎない。出家修行者への施与によって宗教的功德を得ると教えられた在家者には、かれらの容認された社会状況においての道德的行為が命じられていた。このばあい道德的行為は主として家族と有力な政治組織との基盤をもつ善き社会関係の保全にその本質があった。道德的行為は功德を増す因であり、善業を成し遂げて未来に善果を得る因とするという観念によって、宗教的動機付けがおこなわれていた。このように第一の展相においては、倫理の仏教独自の根拠や方向は存せず、実践の内容は他と共有されていた。

第二の展相が始まったのは、大乘仏教の興起とともに仏教的意識のうち的一大変革が生じたときであった。新しい諸概念が仏教の思惟の中心的位置を占め、それらが倫理を可能ならしめた。それはまず「悲」（karuna）や「空」（sunyata）の概念である。この「空」には「即」の論理、すなわち一切の有情が相依の関係にあるという論理を含み、大乘仏教における倫理の根拠となったと考えられるであろう。「悲」は気まぐれの情ではなく、かえって、即の論理の一様相である。「空」は大乘仏教における倫理の根拠であり、「悲」はその方向であると考えられることができるであろう。さらにまた真俗の「二諦」という中観派の概念があり、その俗諦に道德が含まれる。したがって倫理に関する問題は真俗二諦の論理に引き入れられる。要するに「二諦」の概念は「空」と「悲」との関係を明確化する別の方途である。最後に注意しておくべきことは、大乘仏教の倫理的動機付けにおける上記の変遷は、仏教的ユニバーサルリズムのもっとずっとはっきりした理解を必要としたし、また僧院外の在俗生活に対するより一層積極的な評価を必要としたということである。維摩居士のばあいはその一例である。

第三の展相は浄土真宗である。ひたすら「他力」をたのむことは浄土門の、とりわけ浄土真宗の特質であるが、このことは仏教倫理の展開において第三の展相をもたらした。倫理と、凡夫には達成不可能な悟りとの動的一致は、倫理と、一切衆生に開かれた救済との動的一致によってとって替わられた。倫理から救済へ至るのではなく、反対に、他力による救済が、antinomianism と moralism との間に、倫理の根拠を与えるのである。観念の歴史において、他力と倫理とのこの関係は、悟りと倫理との関係の後を継ぐ者であるということに注意しておくこ

とは大切である。この理由によって、真宗における倫理の問題は通仏教的問題であるとともに、またある意味で特有のものである。

最も重要な特徴として注意しておくべきことは、真宗における倫理の全体的な方向が広大な「悲」という大乘仏教の基底的な観念のうちに見出されるということ、そして他方、真宗における倫理の明確な根拠は「他力」による救済の信受にあるということである。

このように真宗における倫理の根拠と方向とを考究してきたとき、その倫理の内容を何であると考えられることができるであろうか。従来真宗の道德性として伝統的に重んじられてきたのは家族関係であったし、なお基本的なものとして「感謝」を挙げることができる。しかし今日人類が直面している問題は、国際紛争と平和、人間や動物の権利、病気や死の技術化、生命工学、消費や廃棄物・毒物の処理などの問題である。これらの問題は仏教經典にも他の宗教聖典にも直接にはなんら扱われていない問題である。このような問題に対して、他宗教とともに、真宗は倫理のその深い根拠からどのように答えることができるであろうか。

パイ教授の発表の内容を、きわめて不十分ながら、かいたまんで報告すれば上記の如くであった。今度の会議の冒頭を飾る講演において示された「真宗と倫理」という問題についての関心はこの会議を特徴づけるものであった。つづく第二セッションは R. Tabrah 女史が司会者をつとめ Shin Ethics and Modern Challenges というテーマのもとに、まずウイーン大学の Simone Zotz 女史が Shin Buddhism and Equality of Sexes という発表を、つぎに Institute of Buddhist Studies の Prof. Ken Tanaka 氏が Ethics in American Jodo Shinshu という発表を、そうしてウイーン大学の Dr. Volker Zotz 氏が Shin Buddhism and the Western Search for New Ethics という発表をおこなった。このツオッツ博士夫妻はウイーン大学で仏教を研究する傍ら、International Association of Buddhist Studies のヨーロッパ支

部のために活躍し、1990年8月にはヨーロッパ真宗会議の主催者をつとめられるということである。Damaru: Buddhistische Zeitschrift という機関誌を刊行するなど、ヨーロッパにおける真宗学研究の一つの重要な拠点をつくる大切な学者であると言ってよいであろう。

ヨーロッパにおける真宗学研究の拠点としてさらに挙げるべきは Jodo André Chevrier 師、そうして Jérôme Ducor 氏であろう。『正信偈』のフランス語訳者シュヴリエ師はスイス・ジュネーブからこの会議に出席され、The Contribution of Images and Symbols to the Expansion of Shin Buddhism という講演をされた。ジュネーブ大学のジェローム・デュコール氏は『歎異抄』のフランス語訳者である。今度の会議では The Beginning of Jodoshinshu and Tendai School of Japanese Buddhism という発表をされた。原典資料に基づく本格的な真宗史研究との印象を与えられた。

ブラジルのリオ・デ・ジャネイロから Candido Mendes University の Prof. G. Pinto 氏が会議に参加され、The Transmission of Jodo Shinshu in Daily Life という題で真宗の体験的了解を講演し、聴衆に感銘を与えた。

最後のセッションではロス・アンジェルスの本田パトリシアさんが Kiyozawa Manshi and the Revitalization of Shin Buddhism という発表をし、その発表をめぐってパークレーのアルフレッド・ブルーム教授との活発な質疑応答があって、興味深く、有益であった。真宗総合研究所において講義をしていただいたことのあるコルゲート大学の Prof. J. R. Carter 教授はこの会議において終始活躍されたし、ハワイ大学で催された Public Forum では、最近 *The Lotus Sutra in Japanese Culture*, 1989. を出版した G. Tanabe 教授が司会をつとめられた。

この会議が盛会であっただけに、この学会の事務局を担当された龍谷大学の稲垣久雄教授のご苦勞をお察しして、感謝したい。

『海外仏教研究』報告

〈指定研究〉

## 国際仏教学会第9回大会に参加して

海外仏教研究班・研究員  
本学専任講師

宮下晴輝  
(仏教学)

昨夏、7月の末と8月の初旬に二つの国際学会があり、それに参加することができたので、以下簡単な報告をしておきたい。

真宗総合研究所の指定研究の一つ「海外仏教研究」は、

海外で行なわれている仏教研究を様々な角度から捉え、延いては我々の研究の位置を確かめる羅針盤の役割を担った研究プロジェクトであるといえよう。このプロジェクトには、まず資料収集という大きな仕事がある。

これまでに、海外で行なわれている仏教研究、あるいは宗教研究に関する雑誌、研究書が収集され、他に類を見ないものといえるほどの成果を上げてきた。十全なものとするにはまだ時間を要するが、また、研究論文のビブリオグラフィーを作る作業も進められ、そのほとんどはデータベース化され、部分的な出版もしてきた。このような資料収集に加えて、海外の研究者との交流も進め、研究状況についての意見交換もしばしば行なってきた。

これまでの作業を継続して行ないつつ、今後積極的に進めていかなばならない課題は、国際学会への参加である。研究の動向は、その研究が行なわれる社会状況に大きく影響される。研究の現地に身を置いてはじめて見えてくるもの、研究成果のみからは知りえないものに触れることを通して、真の「海外仏教研究」となっていくであろう。

さて、今回の国際会議は、一つは台湾で、もう一つはハワイで開かれた。大阪、台北、ホノルル、大阪という巡航であった。開催期日が接近していたのでいた仕方ないことであったが、二つも掛け持ちすれば疲れたという感想だけが残る。また、参加取り決めが遅かったせいもあって、何の準備もなくまったくのシュラーヴァカ（聴聞者）であった。

台北で、7月26日から28日まで、「国際仏教学会」(The International Association of Buddhist Studies)の第9回大会が開かれた。羅斯福路(Roosevelt Rd.)を境に愛国路(Ai kuo Rd.)は東西に分れるが、その愛国東路と信義路(Hsin I Rd.)に挟まれた中山南路(Chung Shan S. Rd.「中山」は蒋介石の号)に面して、中正紀念堂(Chiang Kai-Shek Memorial Hall 蔣介石記念堂)がある。その西対面にある中央図書館(The National Central Library)が会場であった。参加者は、登録名簿によれば、110名あまり。そのうち50名は台湾から、日本からは10名参加した。インドからも10名あまりの参加があり、なかでも仏教論理学(“Ratnakīrti on Momentariness”)の発表をした Rita Gupta 氏は、Visva-Bharati University 所属である。ここで知人の消息に接するとは思いがけないことであった。この世界状況にあって自転車を生産できるインドもすばらしいが、その自転車の後にわが子を乗せてあのタゴールの大学を走り回る友人の姿も結構なものではないか。

今回の会議のテーマは、「人文科学と科学技術とその発展を調和するものとしての仏教研究と仏法」(Buddhist Studies and Buddhadharma as Harmonizers between Humanities and Science & Technology and Their Development 論佛學佛法乃人文思想與科技文明之融攝及其發展)であった。そのサブテーマには、1. 仏教と社会、2. 仏教の歴史と文献、3. 仏教教育と禅、4. 仏教美術、5. 仏教と科学技術の五つがあげられて

いた。四つのパネルに分れて全部で六十二の研究発表と討論がなされた。二つのパネルは英語で、他は中国語である。

今回の会議で、Robert Magliola (NSC Research Professor, National Taiwan University) は、“Upon Hans Kūng’s (Christian) Dialogue with Buddhism: An Inquiry”と題して、スイスの神学者 Hans Kūng の仏教批判に対する反論を展開した。Magliola によれば、Kūng は、1985年に、“*Christentum und Weltreligionen*” (Eng. trans. “*Christianity and the World Religions*”, Doubleday, 1986) という講義と対話集からなる著作を出版した。その中に、イスラム教、ヒンドゥー教、仏教のそれぞれ代表的な学者との対話が含まれ、仏教学者の Heinz Bechert (Univ. of Göttingen) と対話している。Magliola は、そこで話題になったいくつかの問題、すなわち、「空性」という概念、金剛乘における肉体性、仏教の非神話化、無我の論理的不整合性等の問題を取り上げ、彼自身の見解を示した。この反論は、より大部なものとして出版されることになっており、その最初の部分が今回報告された。

Heinz Bechert (Univ. of Göttingen) は、“The Nikayas of Burmese Buddhism” と “Symposium on the Dates of the Historical Buddha” という二つの報告をした。特に後者は、1988年4月11日-18日、Göttingen で開かれたシンポジウム “The Date of the Historical Buddha and the Importance of its Determination for Historiography and World History” についての報告であった。仏滅年代の再検討が、あらゆる角度からなされ、何も確実なことはいえないが、参加者の多くの意見は、仏滅年代を 400 B.C. 前後に置く方向にあったということである。それは例えば、G. v. Simson の「Aśoka の時代には、仏教はまだ比較的に新しい運動であった、とするほうがより確かである」という意見や、また、Wilhelm Halbfuß による “Early Indian References to the Greeks and the First Western References to Buddhism” という報告の中の、「もしつぎのように考えるならば、このすべてはもっと理解しやすいものとなるのは確かである。すなわち、Megasthenes の頃、仏教はまだ2世紀も経っていなかったということ、それと見分けられる記念物や組織がまだ生み出されていなかったということ、そして、Megasthenes が 300 B.C. 頃、Pataliputra を訪れたときには、仏教はまだずいぶん歴史が浅く、十分識別し得るものではなかったということである。」という結論等が、このシンポジウムではより説得力をもったような印象であった。このシンポジウムの記録は、“*Abhandlungen der Akademie der Wissenschaften in Göttingen*” の叢書で “*Symposien zur Buddhismusforschung IV*” と題して出版されるそうである。

その他、Luis O. Gomez (University of Michigan)

の “Myth, Structure and Meaning in the Smaller Sukhāvativyūha” や、Charles Willemen (National Ghent University) の “The Abhidharmahrdaya” 等々の報告があった。

今回の会議の開催地のスポンサーは、The Institute for Sino-Indian Buddhist Studies (華梵佛學研究所) であった。その母体はある尼僧組織と思われるが、その長老 Ven. Hiu Wan (暁雲法師) の歓迎の挨拶で会議は始った。食事はすべてこの研究所によって賄われた。そして Farewell Banquet にいたるまで、不飲酒かつ菜食であった。1991年の次回の会議は、パリで開催されることになったが、Ven. Hiu Wan より、次回の会議においても食事の奉仕をしたいという申し出があった。このチャームな申し出は、しりぞけられることなく、会議の議長 Gomez 氏によって、「考慮する」ということになった。

ところで、会議出席者のほとんどは、圓山大飯店 (The Grand Hotel) というとてつもない大ホテルに滞在することになった。台北市を一望できる小高い丘の上に聳える奇観に圧倒される。蔣介石夫人の経営になると聞いた。そしてここは、かつて台湾神社が台北を睥睨していた場所である。小人にはかえって不安をいだかせるほどに贅沢な部屋を抜け、街に出る。仏教寺院を訪れる。儀礼という点からいえばほぼ無宗教である我々にとっては異様に熱を込めて繰り返し礼拝し、その場で二本の木切れを落としその距離を測って占いをする街の人々、そして寺院の奥に居並ぶ道教の神々。道端の電柱に貼られた「南无阿弥陀仏」。シンクレティズムというのはたやすい。しかし、意味を問う以前だ。目の当たりにする状況がそれでひとつのコンテキストなのだから。経済状況についていえば、我々の歩んだ一時期に相当すると見ることができただろうか。インド等のアジア地域に訪れたものがよく口にする言葉でもある。諸民族が、我々が、あたかも孤立した歴史を生きているかのように言う。しかし、彼等も我々も、同時代を生きている。我々の豊かさが彼等の貧困である。そして台北での彼等の礼拝が、そのまま我々の無宗教を指しているかのように思えた。

会議が終り、参加者とともに、Ven. Hiu Wan の案内で台北市効外のある山寺を訪れた。禪寺であった。コンクリで趣はなかったが、この山腹の寺にも参拝者は絶えず、夕暮、本堂で読経が始った。阿弥陀経であった。鐘をつき、僧も尼僧もともになって経行する。読誦の実に美しいこと。ここにいくぶん、歴史の嫡子を見たように

思った。帰路に開いた寺のパフレットには、開基について述べてあり、その示寂したとき、空に光が満ちたとあり、その写真も載せてあった。こちらが歴史なのだ。

やや複雑な思いをもって、台北からホノルルに向った。ホノルルでは、8月1日から3日まで、「国際真宗学会」(International Association of Shin Buddhist Studies) が開かれた。その詳細は、本誌記載のもう一つの報告に譲る。この学会にはじめて参加した印象をすこし記しておく。会長の M. Nagatomi 氏の報告の中にあっただが、もう少しアカデミックな学会にすべきであるかどうかという議論が毎回なされているようである。その点確かに、発表全般にわたって中途半端な感じをもったことは否めない。しかし、こじんまりした学会でもあり、参加者のほとんどが、その仏教への関心を信仰のもとに置いているという点で、学会が今後どういう軌跡を描こうと、学会そのものの意義は十二分にあるといえる。大谷大学からもっと積極的に参加すべきであると思う。会議の最後、リオデジャネイロから参加した Gustavo Pinto 氏の「真宗はもはや日本民族の宗教ではない」という言葉が印象的であった。

台北では、IABS が中心になって進めている大正新脩大藏経のデータベース化について聞いた。プログラムは出来上がり、入力段階になっているそうである。おそらく台湾で入力されることになるであろう。また、パリ語テキストについては、バンコックですでに全部入力が終わっているそうである。但し、シャム版であり、王様の六十才の誕生日にあわせてなされたもので、きついプロテクトがかかっている、誰もが使えるようには配慮されていないということである。チベット語のテキストは、デリーで少しづつコンピューターに入力されているらしい。また、台北でデルゲ版のブックスタイルでの出版が準備されていた。近年大谷大学にも所蔵されたきわめて良好な刷りのデルゲ版である。またきわめて入手しやすい値段でもあるという。

IBS の Ken Tanaka 氏によって、浄土教に関する論文のビリオグラフィーが作成されつつある。すでに海外仏教研究班によっても一部出版されたが、さらに、龍谷大学、仏教大学等も同種のビリオグラフィーを準備しつつあると聞く。出来ることならば互に協力し合って取り組んでいった方がいいと、ホノルルでは話し合ったのだが、対外的チームとも協力し合えるように、我われ海外仏教研究班の態勢も少し建て直しをはかる時であるかもしれない。

『海外仏教研究』研究会報告

日時：1989年6月8日(木)

場所：研究所会議室

## いくつかの大学を訪問して アメリカの仏教研究点描

海外仏教研究班・研究員  
本学助教授安 富 信 哉  
(真宗学)

真宗総合研究所(真総研)の海外仏教研究班では、「海外における仏教研究の方法論と資料収集」というテーマでプロジェクトがもたれ、これに対して、昨年より私学振興財団による助成金が与えられている。このプロジェクトの活動の一環として、今年(1989)2月から3月の約6週間にわたって、私は、アメリカのいくつかの大学を訪問し、仏教研究の現状を調査する機会を与えられた。ごく短期間のことでもあり、不十分な点が多々残ったが、今回の訪問で学んだことや感じたことを概略的に報告したい。

### ベイ・エリア

2月19日(日)11時37分、私の搭乗したユナイテッド航空810号は、春の陽ざしの暖かいサンフランシスコ空港に着陸した。この最初の訪問地では、湾域(Bay Area)に点在する仏教学関係の諸機関を訪ねた。

IBS パークレーの仏教大学院(Institute of Buddhist Studies、以下IBSと略称)では、学監のAlfred Bloom博士(真宗学)と副学監のKenneth Tanaka博士(中国浄土教)にお会いした。K.タナカ氏については、昨年この真総研でご講演いただいたのでご記憶の方もあろう。ブルーム氏には、久しぶりにお話を伺った。以前心臓病で倒れたが、いまは健康も大分回復したご様子であった。IBSは、浄土真宗本派本願寺系の米国仏教会(Buddhist Church of America、以下BCAと略称)が設立母体で、アメリカ全土の日系社会の支援をえて、開教使養成と仏教研究のための機関として、1966年に創立され、ここから「教師資格」が授与された。1985年2月、IBSは、総合神学大学院(Graduate Theological Union、以下GTUと略称)に学部加入した。このGTUは、キリスト教諸派やユダヤ教などで構成されている大学院大学であるが、IBSは、1985年秋学期から、仏教学修士(MA)を授与する交流プログラムをGTUともつことになった。

IBSの教育は、まず仏教(真宗)を英語で学ぶという

こと、また書物を通してだけでなく、仏教徒が実際に体験しているような形で教え、学ばねばならないという方針のもとに行われる。さらに、隣接するU.C.パークレーや近郊のスタンフォード大学との学術交流をふかめるとともに、情緒的な仏教(真宗)理解から体系的な理解の方向をめざしている。現在学生数は11名で、真宗学専攻5名、仏教学専攻6名である。図書館は、とくに浄土真宗関係の仏教書を重点的に備えている。約一万冊。定期的なジャーナルとしては、*The Pacific World- new series*が刊行されている。

ブルーム博士は、極めて異色な仏教学者である。概してアメリカの仏教学者は、研究テーマを一ヶ所にとどめず、様々な場所に移してゆく傾向にあるが、氏は、一貫して真宗の規範的研究に従事してきた。私は、一昨年度大学の講読クラスで、先生の近年の論文である“Jodo Shinshu- the cosmic connection”を学生と読んでいたので、いくつかそのとき感じた疑問をお尋ねしてみた。たとえば氏は、ここで、真宗を象徴体系として理解しようと試みておられる。その意図はどのようなところにあるのか。これに対して、氏は、まず自分は西洋の伝統で育った人間であることが出発だと強調し、浄土真宗を象徴体系としてみることによって、私たちがひとつの像(picture)を描き出せるのだといわれた。そして、

「神話や象徴は、空虚な真実(empty reality)ではなく、我々の想像力を掻きたてる力をもっている。私の考えでは、どのような宗教的伝統も神話や象徴があり、それはすべて人生を理解するための方法である。象徴を通して私たちは、宗教の根源的な原理をみるのだ。その意味で、自分は真宗を象徴体系として描き出してみたいと思った」

とことばを続けた。お話を伺って、私は、氏の方法が、真宗のメッセージを現代西洋の思想的・社会的文脈のなかで、どう解釈し、どう表現するかという模索と実験であると感じた。今後どう展開するか。興味ぶかい。

ヌマタ翻訳センター つぎに私は、Numata Center

for Buddhist Translation and Research を訪れた。私たちの真総研に第1回客員研究員として滞在された羽田信生氏にご案内いただき、所長の Kiyoshi Yamashita 師にインタビューした。ヌマタ翻訳センターでは、株式会社ミットヨの創業者で、仏教伝道協会の設立者である沼田恵範氏の発願で、漢訳大蔵經の英訳を開始しているが、この英文大蔵經は、130点余を出版の予定である。この度その第1巻が出版の運びとなった。翻訳者は、米国人(40%)、日本人(50%)、その他(10%)の構成で、所長のヤマシタ師と所員の羽田博士が、おもに日本人の訳稿をチェックする。また米国人などの原稿は、こちらの仏教学者にレビューしてもらうということであった。この事業は、仏教伝道協会の手で進められ、ほかに米国の主要大学の「仏教講座」(Numata Chairs)の開設などが推進されている。

米国仏教会「年次総会」2月25日(土)、私は、羽田先生ご夫妻のお伴をして、サンフランシスコのジャパン・センター内のミヤコ・ホテルで催された米国仏教会(BCA)の年次総会を傍聴した。総会は、「聞法一親鸞聖人の声」のテーマのもと、日本語と英語の二つの会場で開かれ、私は英語の会場に顔を出した。ここでは、サンフランシスコ仏教会の山口智祥師の司会で、5人のパネリストが登壇し、20分づつの基調講演があった。200名以上の聴衆があった。現在BCAの開教使は、現役で73名(61~63寺院)であり、今年の総会にはそのうち40名から50名が出席しているとのことであった。総会は、例年2月にもたれるが、今年はBCAの開創90周年総会ということで盛大に挙行された。会場やその他の場所で、何人かの開教使の方々からお話を伺ったが、米国真宗の将来について、異句同音にふかい危機感を表明しておられたのが私の心に残った。

スタンフォード大学 パークレー最後の日程として、スタンフォード大学を訪れた。IBSのK.タナカ博士の車で、まっ青な空の下に広がるサンフランシスコ湾を眺望しつつ、パークレーから1時間ほどフリーウェイをとばし、スタンフォードのキャンパスに入った。構内には緑の木立のなかに平屋の校舎が点在し、中央に巨大なフーヴァー・タワーがそびえ立っている。

この大学の宗教学の研究は、人文学部宗教学科のなかに、東アジア宗教専攻(East Asian Religions)、ユダヤ思想専攻(Judaic Studies)、西洋宗教専攻(Western Religions)、現代西洋宗教思想専攻(Modern Western Religious Thought)の4分野があり、仏教学は、そのうちの東アジア宗教専攻で行われている。またスタンフォードには、東アジア研究センター(Center for East Asian Studies)という別組織があり、とくに中国・日本の民族、文化、経済etcの研究がなされ、このプログラムのなか

に宗教研究も含まれている。ただ実質は、宗教学科のなかの東アジア宗教専攻がそれを行っているようである。

仏教学の教員は、Bernard Faure(唐代禪思想)、Carl Bielfeldt(禪思想)、Allan Sponberg(唯識思想・中国初期仏教史)、Ann Klein(チベット仏教)の各氏である。私は、ビールフェルト博士とスポンバーグ博士にお会いした。スタンフォードの仏教学は、昨年フォール氏がテニューアをとり、今年ビールフェルト氏が昇格することによって正式に発足した。仏教学は、宗教学科のなかでは今まで力が弱く、財政的にも恵まれなかったが、今年はいじめてレギュラー・テニューアが2人になって新たに始動した。現在学生数は、Ph. DとMAあわせて6名で、すべて白人であるが、禪を研究しているのは1人で、真言仏教、平安民衆仏教、慧遠、初期タントラ、と学生の研究領域は多彩である。

図書館はフーヴァー研究所のなかに、East Asian Libraryがある。カリフォルニア大学パークレー校(U. C. パークレー)のような仏教学の歴史がないために、両大学の図書館のあいだには互恵協定があるとのことである。パークレー校が、より伝統的な仏教学(buddhology)の方法をとって言語学が強調されるのに対して、スタンフォードは思想研究が強調される。また包括する領域も、パークレーが南アジア中心であるのに対して、スタンフォードは東アジアを中心としている。スタンフォードは、パークレーと競争するのではなく、協力するのだといわれていた。今年は、スタンフォード・パークレー合同仏教セミナー(Joint Stanford-Berkeley Buddhist Seminar)が、「救済論」のテーマで催される。これにはIBSも協賛する。

ビールフェルト氏に、この大学の仏教学のアプローチについてお訊きしたところ、自分とフォール博士のやろうとしていることは、伝統的なphilologyの強調よりも、むしろ仏教に対して、新しい角度から問題を提起することであり、したがって言語研究や翻訳よりも解釈を強調するとともに、たんなる思想史ではなく、思想と社会の関係、象徴のもつ意味などを明らかにしたといわれていた。この学科からのジャーナルの発行はないが、前述の合同仏教セミナーでいつか出版したいと考えているようである。

#### ミシガン

2月28日(火)、私はシカゴに入った。オヘア空港には、シカゴ仏教会の足利法敬師がお出迎え下さった。サンフランシスコは春であったが、こちらはまだ寒気が強い。シカゴ仏教会には、5年ぶりに訪れた。会長の久保瀬暁明先生は、加州に出張のため生憎ご不在であった。私は、ここでの勉強会に出席した。テキストは、暁鳥敏師の「独立者の宣言」(Shout of Buddha)。出席者は、白人4人、日系人3人。現在この仏教会には、400家族ほどが加入

している。ところで、中西部の仏教学の要所といえば、申し上げるまでもなく、ウィスコンシン大学なのだが、日程の関係で今回は訪問を断念せざるをえなかった。ただ清田実先生と奥様のお元気な声を電話で聞くことができた。大谷大学の諸先生によろしくお伝え下さいとのお言伝を賜わった。

ミシガン大学 3月3日(金)、シカゴからデトロイトに飛び、近郊のアナーバーにあるミシガン大学を訪れた。キャンパスには、ゴシック風の建物が立ち並び、ヨーロッパの古い街角に行ったようだ。仏教学は、アジア言語・文化学科 (Department of Asian Languages and Cultures) で行われている。2、3年前までは、この学科は、極東言語学科 (Department of Far East Languages) であったが、仏教学の力が増して、今日の名称に変わったという。この学科のなかには、日本語専攻、中国語専攻、仏教学専攻の3分野がある。この3つの専攻のなかでは仏教学の学生数が一番多い。Ph. D 5人、MA 7人と増えつつある。仏教学専攻の専門は2つに分かれるが、南アジア (インド・チベット仏教) が6人、東アジア (中国・日本仏教) が5人ということであった。

教員は、私たち真総研にも大変に馴染みのふかい Luis O Gomez 氏 (サンスクリット・チベット仏教) と若手の Griff Foulk 氏 (中国・日本仏教) の2人である。もう1名チベット関係の学者を入れる予定であるとお聞きした。私の訪問中、長尾雅人先生 (京大名誉教授) が客員教授として、中観の講義におみえであった。

指導の方針としては言語が基礎。それにプラスして思想を学ばせる。それは、哲学というよりも批判的思考を養うためである。私はゴメツ教授の MA レベルの資料研究法 (Tools and Method) のセミナーを傍聴させて頂いた。私が訪れたときには、テキストをどう読むかという学生に課した宿題に、一人ひとりの説明を求め、そのあとそれぞれにゴメツ先生がエリアーデやエリクソンなどの名前を引用しながら学生を指導していた。

一体なぜ〈方法〉ということがことさら課題となってくるのか。インタビューのなかで、ゴメツ博士はつぎのように説明された。

「西洋の仏教学のモデルとなったのは、言語学、別なことばでいえば、ギリシア語研究やラテン語研究であった。だから仏教学は、人文学の他の側面と平行して発達してはこなかった。ここにひとつの問題がある。ところが西洋の古典文学研究あるいは現代文学研究は、すでに別な方向に発展した。そこでは、文芸批評や文体の分析をやっている。これは、仏教学が最近までかかわってこなかった領域で、大いに仏教学を刺戟する酵素がある。西洋の人文学、とくに文学理論や文芸批評は急速に変貌しつつある。これが仏教学にも影

響を与え始めている。今はやりの解釈学 (hermeneutics) とか脱構築 (deconstruction) への注目もその影響のひとつといえる。

別な理由としては、私が思うに、西洋における方法論の重視は、一般的にいえば、世俗社会や複合社会の発達と関連している。それらはまずヨーロッパに特有の現象であったが、やがて北米、日本、南米など、ほかの世界にも入ってきている。社会は複合的になりつつある。そのなかにあつて、様々な物の見方が競合するようになってきた。そこに問題が生じた。競合する物の見方を、どうしたらできる限り中立的に判断してゆくことが可能なか。こういう問題である。結局そこに〈方法〉ということがでてくるのである。人文学は、とりわけ複雑になってきている。というのは、人文学は、人間の価値、主観的感情と密接なかかわりがあるからである。このなかにあつて中立的であることは容易ではない。」

すなわち仏教学で〈方法〉が改めて問題になってきている理由として、一方は文学研究からの、他方は複合的社会状況からの影響があるといわれるのである。私は、ゴメツ博士が大きな視野から仏教研究を位置づけていることに強く印象づけられた。氏は、いまアメリカでもっとも多忙な仏教学者の一人ではなからうか。それは、博士の厳密な学問と大きな視野に立った方法が広く学界に支持されているからであろう。

さてミシガン大学には、Hatcher Library がある。2階に総合的なカタログ・ルームがあり、4階がアジア・セクションである。仏教関係では、おそらく中西部随一の図書館であろう。真宗関係もアメリカの大学としてはかなり充実していて、オーバーリン大学の J. Dobbins 氏もここを利用されるとか。出版物は、仏教関係の定期刊行物やニュースレターはないが、予定としては、*Studies in the Literature of the Great Vehicle: Three Mahayana Buddhist Texts* (Michigan Studies in Buddhist Literature, No 1) をゴメツ氏と J. A. Silk 氏が編集・発刊することになっている。

#### イースト・コースト

3月8日(水)にニュー・ヨーク入りした。あちこちに残雪がみられたが、ミシガンに較べれば気温は大分ゆるい。イースト・コーストでは、当初色々な方にお会いするつもりであったが、中々日程の調整がつかなかった。ただ幸いワシントンで開かれたアジア学会 (A. A. S.) の日程に間に会った。

コロンビア大学 N.Y では、コロンビア大学に、Alex Wayman 博士 (チベット仏教) と Paul Watt 博士 (日本仏教) を訪ねた。この大学の東洋学の歴史は古いが、

仏教学だけのコースはない。仏教研究を志望する学生は、中東言語・文化学科 (the Department of Middle East Languages and Cultures)、東洋言語・文化学科 (the Department of East Languages and Cultures)、宗教学科 (the Department of Religion) の三つの学科のうちのどれかに所属して行く。しかし学科交流プログラム (interdepartmental program) があり、所属学科にしばられず仏教の研究を行うことが可能である。仏教学で Ph. D のコースに在籍する者は10人ほどで、あまり多くの学生は受け入れず、言語の depth training を行うとのことであった。

この度、新しい教授に Robert Thurman 博士 (チベット仏教) がアムハースト大学から移籍したことは、大きなトピックであった。が、一方、Hakeda 博士は数年前に逝去し、Yampolsky 博士は1990年に停年、Wayman 博士も1991年に停年退職予定。ワット博士は、この秋からデポウ (DePauw) 大学に移る。チベット仏教を除き、中国・日本仏教の後釜は、大学の経済的理由からまだ見通しが立たない状態という。卒直に言えば、コロンビア大学の仏教研究は、いま過渡期にあるという印象を受けた。

ところで、同じ仏教研究といっても、言語学系の学者と宗教学系の学者とでは、アプローチの仕方が異なる。その違いを強く感じさせられたのは、解釈学をめぐっての二人の学者の評価の違いであった。典型的な buddhologist であるウエイマン氏は、最近の仏教学者の解釈学への関心について、皮肉まじりに、

「私は解釈学はやらない。モーツァルトもベートーヴェンも作曲をしたのであって、クラスで音楽理論を講義するようなことはしなかった。創造的なひとは、そんなことはしない。私は、いつも解釈しているから解釈理論に興味はない。」

と述べた。これに対して、若手のワット氏は、解釈学の大切さを強調する。

「いまは、方法論について考えなければ、宗教学はできないという世の中である。解釈学を勉強しないで宗教学をやるといことは考えられない。これが出発点である。デカルトあるいは17世紀や18世紀の人たちが願っていた客観的な立場はもはやありえないということが前提であって、その前提において学問をするとき、お互いに批判し合うということがとても大事になってくる。自分の立場が真実であると主張するとき、何らかの形で解釈の立場をとらなければならない。仏教でいう『判教』もそういうことであったのではないだろうか。」

と。解釈学についての、対照的なお二人の評価は、学問観の相違ともとれるが、一方、そこに私は、仏教研究の新しい波の抬頭のようなものも感じ、興味ぶかく拝聴したことであった。

コロンビア大学では、仏教関係の図書は、アジア関係

の学科のあるケント・ホール1階の C. V. Starr East Asia Library に入っている。この C. V. スターという人は、寄付者の名前であるらしい。仏教関係の出版物は、ジャーナル類はないようで、*Oriental Classics* のシリーズのなかにいくつか研究書が収められている。

アジア学会 (A.A.S.) アメリカにある大きな学会で、仏教研究の発表の場となるものとして、アメリカ宗教学会 (American Academy of Religion) とともにアジア学会 (Association for Asian Studies) がある。アジア学会は、アジアの政治・経済・歴史・文化・宗教 etc を包括する学会であるが、このなかで仏教研究も次第に大きな比重を占めるようになってきている。今年は、3月17日 (金) ~19日 (日)、ワシントンのヒルトン・ホテルを会場として開催され、私も2、3の部会を回ってみた。

3月17日、N.Y のベン・ステーションからメトロ・ライナーに乗車。ワシントンに向った。受付で、レジスターの料金として70ドルを支払って、急遽、会員になった。この学会には、3500名ほどの参加者があるとのこと。このためホテルは、胸に様々なネーム・プレートをつけた人々でごったがえしていた。

私は、まず初日の夜7時から開かれた Joseph Kitagawa 博士の著作 *On Understanding Japanese Religion* をめぐり討論部会に出た。これは、日本宗教研究会 (Society for the Study of Japanese Religion) の主催で行われ、会場には、今回とりあげられた書物の著者であるキタガワ博士 (シカゴ大学) ご自身の姿もみえた。先述のワット氏の司会で、Edmund Gilday (ボードイン・カレッジ)、Neil McMullin (トロント大学)、Bill LaFleur (U.C.L.A) の各氏が、自分とキタガワ博士の宗教研究との出会い、この書物が貢献するもの、また問題点について発表した。30人ほどの聴衆であった。

翌日の午前中、日本密教研究部会 (Studies in Japanese Esoteric Buddhism) に出席した。聴衆は約100人。この部会にはパネリストが3人出て、これもワット博士が司会の任にあたられた。まず Paul Groner (ヴァージニア大学) 氏が、10世紀の日本における政治と密教儀式との関係について講演し、つぎに George Tanabe (ハワイ大学) 氏が、高野山における儀式について民間伝承の視点から講演し、最後に司会の P. Watt 氏が、観尊と忍性の密教について講演した。これらの発表について、講評者として、B. LaFleur 氏が加わり、そのあと聴衆とパネリストとの質疑応答があった。

午後は、会場を変えて、“The Yamaguchi Story” という映画を観賞した。このフィルムは、東京在住のサラリーマン山口一郎氏の家庭をモデルにして、現代日本の宗教状況を探ろうという、B.B.C. 教育放送製作の作品で、内容は、山口氏の夫人が自分の精神的な問題から真如苑に入信し、やがて夫一郎氏もまたこれにかかわると



いう物語である。この御主人は、代々真宗の門徒ということで、家庭の問題につき、仏教情報センターを通して、児玉暁洋師に相談するというストーリーの展開があり、そのあと同氏の大谷専修学院における講義、さらに同朋会運動の紹介と訓覇信雄師の講話のシーンがある。いわば新宗教と伝統的宗教の両側面を映像で紹介し、現代日本の宗教情況に迫ろうというのが、この作品の趣旨であるように思われる。まさかワシントンのホテルで児玉先生と訓覇先生のご尊顔を拝しようとは思わなかった。上映のあと、製作者の Jamie Hubbard (スミス・カレッジ) 氏がこの映画の意図について、Steven Smith (アムハースト大学) 氏が物語について、Helen Hadacre (プリンストン大学) 氏が日本の新(興)宗教についてそれぞれ解説し、出席者からの質問を受けた。会場には7、80人はいただろうか。

以上、いくつかの発表についてご紹介申し上げたが、印象を強いてひとつだけいえば、それは、批判的検討の重視ということである。たとえば、最初に私が傍聴した部会は、キタガワ博士の著作の批判的検討で、パネリストのマクマリン氏の冒頭のことは、「日本語で猿も木から落ちるという諺があるが……」であった。翌日の日本密教の部会における講評者 (discussant) の配置も、批判的検討の目的に沿ったものであると思われた。

ハーヴァード大学 3月19日(日)にN.Yからボストンに入った。まず本学大学院仏教学科出身で、真総研「海外仏教研究」班のスタッフのひとり(現在は嘱託研究員)である Robert Rhodes 氏にお会いした。いま氏は、ハーヴァードの博士課程で、天台教学を中心に研究を進めている。久しぶりにみる氏は、長髪で、学生に戻ったような風貌であった。もうこちらへ来て1年8ヶ月になるとのこと。

ハーヴァードの仏教学については、ローズ氏が『仏教学セミナー』(49号)に報告記事を寄せるということであった。したがって、通りがかりの一訪問者にすぎない私は、ごく表面的な事柄にだけ触れてみることにする。

ここでは、仏教学科という専門コースはない。仏教学を志す者には二つの道が開かれている。第1は、文理学院 (Graduate School of Arts and Sciences) で、このなかの東アジア言語・文化学科 (the Department of East Asian Languages and Civilization, EALC と略称) とサンスクリット・インド研究学科 (the Department of Sanskrit and Indian Studies) の2分野で仏教学を専攻できる。第2は、神学校 (Devinity School) で、ここの Ph. D と MA のレベルで仏教学を専攻することができる。さらに1959年には、匿名の寄付者によって、神学校内に世界宗教センター (Center for the Study of World Religion) が設立されて、ここに宗教研究のプログラムが始まった。このプログラムは、文理学院大学院と神学校の関係者で

構成した委員会が管轄する。ここでは資格は授与されないで、学科とはいわずプログラムといっている。このプログラムは、(1)比較宗教、(2)単一宗教伝統、(3)宗教と関係領域、の選択がある。

教授陣にふれてみる。ハーヴァードには、宗教学、言語学、人類学などの領域で、仏教に造詣のふかい教授は少なくないが、仏教学教授 (Professor of Buddhist Studies) の肩書を有するのは、永富正俊博士おひとりである。私は、かつて高名な仏教学者である Harvitz 博士からお話をうかがう機会があった折、氏が、永富先生を評して、'Mr. Buddhism' といわれたのを思い出す。先生は、インド・チベット・中国・日本の仏教の全領域に豊かな識見をお持ちのアメリカ有数の仏教学者である。同氏以外には、神学校に David Eckel 教授がおり、インド・チベット仏教およびインド哲学史を講じている。またサンスクリット・インド研究学科には、Michael Witzel 教授ほか、サンスクリット学者がいる。

仏教の研究を志してハーヴァード入学を希望する応募者は少なくない。そして難関を突破して、大学院で学んでいる学生は、現在18名を数える。学生の就職はいいが、研究専門の大学 (research university) 以外の一般の大学に就職するケースが多いので、学生には、専門領域だけでなく、広い領域にわたって研究することが求められている。

仏教の文献は、Widener Library と Harvard Yenching (燕京) Library に入っている。ワイドナーは総元締で、サンスクリット、パーリ、ダルシヤナ関係。イェンチンは、チベット、中国、朝鮮、日本関係。日本仏教は、3階のフロアで、その充実ぶりはあきれるばかりである。ローズ氏は、この地で学ぶために、日本から相当量の専門書をもってきたが、図書館をみたら大抵あったので持ってくる必要もなかったことが分かったと述懐している。出版物については、東洋関係では、*Harvard Oriental Classics* があるが、最近ではでない。また *Harvard Journal of Asian Studies* がある。これは、文学・歴史の論文が中心で、仏教関係は少ないようである。

ところでハーヴァードでは、しばしば他大学から仏教学の教授を招聘して、研究の活性化を図っている。私が訪れる少し前には、ミシガン大学のゴメツ教授が講義に來訪していたし、日本からは、最近では、東京大学の高崎直道教授が來講されたり、ヌマタ基金で京都女子大学の徳永道雄教授が滞在して、真宗学を講じられたりしている。これらは、学生に大きな刺激となっている。ただ外来の講師の場合、滞在期間は限られており、一貫した指導という点では永富博士ひとりが背負っておられる。

私は、永富先生に、最近の仏教学界における解釈学への関心の高まりをどうみるか伺ってみた。"Buddhist Hermeneutics" という論文で、いわば今日の解釈学への関心を呼び起した Robert Thurman (コロンビア大学)

博士も、またこれに中国仏教の側から応答して、“Chinese Buddhist Hermeneutics: the case of Hua-yen”を発売した Peter Gregory (イリノイ大学) 博士も、ともに永富門下の学者である。先生は、これらの二人のレベルにおいては文句はいわない。なぜならあの論文は、scripture のかかえている表面の意味ではなく、その背後の意味を尋ねているからである。それには意義がある。しかし今は、‘hermeneutics’を「解釈」とほとんど同義に用いている。その方がカッコイイというわけである。そこで私は、この現象を皮肉って学生いうことが多いのです、と述べておられた。

永富博士には、5年ぶりに拝趨し、以前と同じく親切なご配慮を賜わった。先生のもとで研鑽しているローズ氏や他の研究者の幸福をひそかに想ったことである。

以上が、駆け足で回った諸大学である。このあとヴァーモント大学を訪ね、宗教学科の教授で『往生要集』や『選択集』の研究者として著名な Allan Andrews 博士と旧交を暖め、3月31日(金)にN.Yよりユナイテッド航空801で帰国の途についた。

今回の調査旅行で感じたことを簡単にまとめていけば以下のようなものである。第1は、若い仏教学者の抬頭である。いくつかの大学を訪れてみて、世代の交替が進んでいるとの印象を受けた。私が出席したアジア学会(AAS)の参加者の顔ぶれをみても、40代の若手の学者が多い。新世代の学者が増えてきているようである。

第2は、学生数の増加である。その原因として、一方に、東洋の宗教への関心の高まりが背景にあることは勿論であるが、他方、マーケットとの関係があることも見落せない。仏教学専攻生は、就職については割合楽天的であった。宗教学の置かれている大学では、そのコースのなかに、非西洋世界の宗教の専門家を一人はおくので、道は開かれている。また日本語のできる学生は、仏教以外の分野に移っても就職の可能性があるからである。

第3は、方法論の多様化である。文献学つまり精密な分析と註を軸とした伝統的な仏教学は、他の学問分野からの影響を受けつつある。たとえば仏教を「法」の解釈学として、あるいは解釈学の方法を用いて研究することもそのひとつであろう。別な見方をすれば、仏教は、仏教学の専門領域であったが、いまや他の領域(宗教学、歴史学 etc)でも大切な研究の対象になってきたということかもしれない。全体的には、翻訳とならんで解釈ということが重要な意味をもってきているようである。

これらのことを総合して考えると、アメリカの仏教研究は、その裾野をさらに広げつつあるようである。若手の仏教学者のなかに、これから仏教研究の中心地は、日本からアメリカに移るだろう、という観測を述べたひとがいたが、日米の仏教研究は、これまでと違って、やが

て競争と協力をともにする新しい段階に入ってゆくのではないだろうか。

## 研究所行事

昨年9月以降の研究会は次のとおりである。

### 真宗学事研究 研究会

12月14日(木)「大谷大学三百年史に向けて」

寺川俊昭学長

2月20日(火)「学寮図面集について」

嘱託研究員 深田虎雄氏

「順崇・徳龍・行忠の三師について」

資料整理員 山口昭彦氏

3月12日(月)「龍谷大学史編纂について」

龍谷大学 日野 昭教授

3月19日(月)「近代における教学の課題」

本学名誉教授・嘱託研究員 柏原祐泉氏

### 海外仏教研究 研究会

9月4日(月)“On the Recent Buddhist Studies in Goettingen”

ゲッティンゲン大学 S. Dietz 博士

9月8日(金)「国立ブータン図書館」(スライド使用)

フランス国立科学センター 今枝由朗氏

9月19日(火)

“The Concept of Duhkha in Buddhism”

ジャイナ研究所 N. Tatia 博士

9月21日(木)“The Early Buddhist Yoga”

ジャイナ研究所 N. Tatia 博士

### 大学開放と生涯教育の研究 研究会

9月25日(月)「戦前の大谷大学開放事業について」

嘱託研究員 瀧 弘信氏

11月24日(金)「生涯を学習する—市民と共に学ぶ現場から」

研究所長・チーフ 渡辺貞磨教授

12月6日(水)「佐々木月樵先生における大学開放の願いについて」

本学名誉教授 山田亮賢氏

## 研究所報 第23号

1990年3月20日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒603 京都市北区小山上総町